大正日本の『ルバイヤート』

杉田英明

［目次］

一　大正初期の抄訳数種
（1）増野三良譯「ルーバアイーヤウト（波斯四行詩）」
（2）小林愛雄『近代詞華集』より「酒」
（3）辻潤譯「ルバイヤット」
二　片野文吉譯『ルバイヤット』
三　荒木茂「オムマ、ハヤムと「四行詩（ルバイヤット）」全譯」

一　大正初期の抄訳数種

（1）増野三良譯「ルーバアイーヤウト（波斯四行詩）」

一九一二年七月三十日に明治から大正へと改元されると、その後二年ほどのあいだに、フィッツジェラルド Edward FitzGerald（一八〇九―八三年）の英訳からの重訳が立て続けに三点、抄訳の形で発表された。その嚆頭を飾るのが、雑誌『朱欒（ザンボア）』に掲載された英文学者・増野三良（ましのさぶろう）（一八八九―一九一六年）のウーマア、カイヤウム「ルーバアイーヤウト（波斯四行詩）」[1]である。

増野は島根県濱田市出身、一九一一年に早稲田大學文學部英文學科第一部卒業[2]、大阪毎日新聞社に入社するとともに詩誌『未來』でも日本語・英語双方で創作する詩人として活動したが、結核のため夭折した。オスカー・ワイルド Oscar Wilde（一八五四―一九〇〇年）などの欧米文学から東方の詩作品へと関心を拡げ、とくに一九一五年にはインドのベンガル語詩人タゴール Rabīndranāth Tagore（一八六一―一九四一年）の英語版詩集を、タアゴル著『印度新詩集　ギタンヂヤリ（贄祭の歌）』（四月）、同『幼兒詩集　新月』（五月）、同『印度新抒情詩集　園丁』（十月）と題し、『朱欒』の刊行元でもある東雲堂書店から相次いで上梓している[3]。一九一五年はタゴール来日の前年に当たり、増野訳は、タゴール作品の日本における最初期の紹介に属する。中東関係

では、「カシイダア（亞剌比亞詩集）[4]」や、テヘランからの書簡という体裁を取った随筆「波斯だより[5]」なども残している。

『朱欒』に掲載された訳詩は、フィッツジェラルド英訳の第四版[6]（ただし第一歌のみ初版）をもとにした、冒頭の二十三歌のみであったが、訳者はまもなく平安堂より、（おそらく全訳を）富本憲吉装丁、杉浦非水挿画で刊行する予定であったらしい[7]。これは訳者の逝去によって実現せずに終わったものの、原稿の散逸を惜しんだ早稲田大學英文科の後輩で同郷の友人・幡谷正雄（一八九七―一九三三年）が一九二九年、その改訂版訳稿から冒頭の十五歌を自らが編輯する雑誌『イギリス文學』に掲載している[8]。その幡谷による「はしがき」には次のように記されている。

三良さん（私らは小さい時からさう呼んでゐた）は晩年印度に凝つて、ウバ（ママ）ニシヤツドや佛教の研究もした。さういふオリエンタクズ（ママ）ムの憧憬から終に「ルバイヤツト」を愛讀したのであつた[。]故里の濱田港に臨んだ松原灣の邊にある寺に病を養つてゐた三良さんと「ルバイヤツト」を談し合つたのはもう十五六年前の夏のことであつた。この譯稿は既にその頃出來てゐたもので、故上田敏博士が校閲をせられた。そして三木露風氏の序文、富本憲吉氏の裝幀で、立派な本となつて出ることになつてゐた。（中略）

三良さんの枕頭にはウインフイールド、その他の英譯本もあつたが、結局フイツヂエラルドの英譯を絶唱と考へてこれを譯したものであらう。

尙この譯本の序文とする積りであつたカイヤム論と、森鷗外氏のルバイヤツト賛なる漢詩があつたが、某氏の（ママ）の手許で紛失した。（後略）[9]

『朱欒』掲載稿と比べると、こちらには主としてフィッツジェラルドの原注に拠ったらしい訳注も付され[10]、上田敏（一八七四―一九一六年）の校閲[11]を経たためであろうか、訳文にも大幅な修正がなされている。ただし、「紛失した」とされる漢詩は、その原稿が鷗外（一八六二―一九二二年）の手許に控えられていたため幸いにも後世に伝わった。「題譯本波斯詩」と題されたこの七言絶句を、古田島洋介氏の訓み下しともども引用しておこう。

寵辱何關諷世詩　寵辱（ちようじよく）　何ぞ関（かかは）らん　世を諷（ふう）するの詩
此心方許蟄龍知　此の心　方（まさ）に蟄竜（ちつりよう）の知るを許すのみ
儻從禹域求同調　儻（もし）禹域（うゐき）より　同調を求むれば
除却坡仙更有誰　坡仙（はせん）を除却（ちよきやく）して　更に誰（たれ）か有らん[12]

「名誉や恥辱は、世間を諷刺する詩には何も関係がない。この詩心は、隠れ棲む龍（世に知られぬ偉大な人物）が理解してくれるのを期待するばかりだ。もし中国で同じ詩風の詩人を探すなら、蘇東坡を措いて他に誰がいるだろうか」というのが大意である。鷗外の自注に「作者　偶（たま）たま蘇軾と時を同じうす。故に及ぶ」（原漢文）とあるように、ウマル・ハイヤーム ʻUmar Khayyām（一〇四八―一一三一年）が蘇東坡（一〇三六―一一〇一年）とほぼ同時

代人であることに着目し、詩風が似ていると感じた後者に言及している。鷗外は、例えば後者の「人生は寄するが如し　何ぞ楽しまざる」（人生は仮りの宿り、楽しむことが何よりです）[13]といった、厭世観と享楽主義とが混ざった詩句を念頭に置いていたのかもしれない。

ここで『朱欒』の初出に戻り、明治期の訳詩の場合と同様、まずは第12歌を引用してみよう。

一卷の詩集が木蔭にある、
また美酒の瓶（かめ）、糧（かて）の山――加ふるに君が、
私の傍で荒寥の野に歌ふて居る。
ああ荒寥はすでに樂園（らくゑん）であつた。[14]

A Book of Verses underneath the Bough,
A Jug of Wine, a Loaf of Bread — and Thou
Beside me singing in the Wilderness —
Oh, Wilderness were Paradise enow![15]

増野訳は原文をそのまま散文訳した印象があるが、末尾の「すでに樂園であつた」は問題があろう。この“were”は“would be”と同義[16]で、第三行までが仮定、第四行が帰結を表わすと見るのが自然である。実際、フィッツジェラルドが依拠したペルシア語原文（ボドレー写本第百五十五番）も“gar . . . bovad”（もし…なら、～だろう）という構成になっている[17]。『イギリス文學』掲載のさいは、ここが「あゝ荒寥はすでに樂園である」と改訂されているが[18]、必ずしも十分とは言えない。

第12歌と共通の源泉（ボドレー写本第百五十五番および百四十九番）から生まれたとされる[19]第11歌も問題が多い。

我と牧草の一片とは相争つて居る、
沃地と砂漠との一目瞭然たる差を。
奴隷と帝王（スールタウン）との名の忘れられた處に
金の玉座の天帝（マームード）に平和がある。[20]

With me along the strip of Herbage strown
That just divides the desert from the sown,
Where name of Slave and Sultán is forgot —
And Peace to Mahmúd on his golden Throne![21]

原文の一行目冒頭に“Come”などの動詞命令形を補って考える[22]と、全体は「奴隷と王者の区別も忘れるほど楽しい、草が散在するあの沙漠と耕地との境界の細長い土地を私と一緒に歩いてゆこう――黄金の玉座に坐したマフムードに平安あれ[23]」といった意味になろう。第12歌で歌われるような、酒とパンと詩集と友人がいる天国のような境地では、奴隷と王者の分け隔ても消え失せるので、誰も王者の平安や幸福を羨むことはなく、安んじて彼に「平安あれ」と言うことができるというのだろう。ところが増野訳は一・二行目を誤解し、“strown”（撒き散らされた）

をなぜか「相爭つて居る」と解釈して、日本語として意味不明の訳文を作り出してしまった。四行目の “Peace to” は “Peace be to”（に平安あれかし）という願望文（願望を表わす仮定法 subjunctive mood）の be が脱落した形だが、これも「平和がある」と直説法で訳されている。ただし『イギリス文學』掲載時には、これらが大幅に改訂され、

沃地から砂漠が目立つ位に續いてゐる
牧草の繁みをたどつて私と偕（いつしよ）に來るがいゝ、
其處では王者（スルトーン）の名も奴隷の名も忘れられてゐる。
金の玉座にすはる Mahmud（マアムウド）に平和あれ！[24]

と面目を一新している。総じて増野訳の特徴としては、『朱欒』掲載分に誤訳[25]が多いこと、誤訳がない場合もこれと言った特徴のない散文訳であること、『イギリス文學』掲載時に一転して大きな改善が見られることを挙げられるであろう。

（2）小林愛雄『近代詞華集』より「酒」

増野訳が『朱欒』に掲載された翌十二月に刊行の、小林愛雄（あいゆう）（本来の訓みは「ちかお」。一八八一―一九四五年）の訳詩集『近代詞華集』にも、フィッツジェラルド訳からの五首が「酒」と題して収められている。[26] 小林は東京帝國大學英文科を卒業後、京華中學校や早稲田實業學校などで教育に携わる傍ら、詩人・翻訳家としてオペラなどの歌曲に多くの訳詞を残したことで知られている。『近代詞華集』は「序文」に「近代の英吉利を主として、獨逸、佛蘭西の詩のいささかを加へたもの」（一頁）とあるように、イェイツ William Butler Yeats（一八六五―一九三九年）に始まり、グノー Charles François Gounod（一八一八―九三年）の歌劇『ファウスト』中の歌曲に至るまで、計九十八編を収めた訳詩集である。「フィッゼラルド以下は古い人になるが、まだ我國に傳へられないので、ここに示して置いた」（同四頁）という。

フィッツジェラルドの第三版ないし第四版に基づいて選ばれた五首[27]は、いずれも標題の「酒」に関連する。このうちから第100歌を例示してみよう。

彼方（あなた）に月はまたもかがやく――
この後幾（いく）たび月は盈虧（みちか）け
この後幾たびわれら照らさむ
この園に――さてもわれ遂には在らず！

Yon rising Moon that looks for us again —
How oft hereafter will she wax and wane;
How oft hereafter rising look for us
Through the same Garden — and for *one* in vain![28]

「我々――第99歌を受けると見做せば、恋人と私――を探し求めてあちらに昇る月は、今後何度満ち欠けし、何度同じ庭園に昇っては我々を求めることだろう。だがそのとき（もはやこの世

を去っている）私[29]を探しても無駄なのだ」というのが一首の意味である。小林訳は、「七七／七七／七七／七七／五五七」という七音と五音の定型のなかに、原詩の意味を過不足なく収めている。

他方、続く第101歌の訳詩も七音と五音で巧みにまとめているものの、解釈にはやや問題がある。

月のごと酒つぐ人の
草の上に星とならべる客のなか、
その喜悦の使もて一つの星のわが邊
よぎらむ折よ　空の盃つげよなみなみ。

And when like her, oh Sáki, you shall pass
Among the Guests Star-scatter'd on the Grass,
And in your joyous errand reach the spot
Where I made One — turn down an empty Glass![30]

「サーキー（酌人）よ、そなたが草の上に星のようにちらばった客のあいだを楽しげに、月と同じように巡るとき、かつて私が客として坐した場所に来たならば、空の盃を伏せてくれ」というのが本歌の趣旨である。「空の盃を伏せる」とは、一説に、宴会に参加しない客の盃を裏返しておく習慣への言及とされる。[31]つまり詩人は、自分が亡き後の宴会を想像して詠んでいるのだが、小林訳は、まだ自分が生きて宴会に参加しているとの前提で「空っぽの盃に酒を一杯に注いでくれ」と、原詩とは逆の意味に解釈しているように見受けられる。

ところで、この第101歌に対応するペルシア語原詩、ボドレー写本の第八十三番と八十四番のうち、とくに右の箇所に関連の深い前者を引くなら、

いとしき仲間ら、たまたま出会うことがあるならば
この友のことをきっと思い出してくれ
君らがうまい酒を一緒に酌み交わすことがあれば
我らの番が廻ってくるたび、どうか酒を灌ぎかけてくれ
yārān chō b-ettefāq dīdār konīd
bāyad ke ze dūst yād-e besyār konīd
chon bāde-ye khoshgovār nūshīd be-ham
nowbat cho be-mā rasad negūnsār konīd[32]

とあって、「酒を灌ぎかける」の原語「盃を傾ける」negūnsār kardan は、地下に眠る故人を偲んで大地に葡萄酒を何滴か注ぐ、いわゆる「灌奠」の習慣に言及しているものと思われる。[33]この原詩を勘案するなら、フィッツジェラルド訳の「空の盃」an empty Glass の "empty" とは、ギリシア・ローマ以来の修辞学で言う「プロレプシス」prolepsis, すなわち「動作の結果を予想して、それを表わす形容詞を使用する」技法[34]であり、「空の盃を傾けよ」とは「盃を傾けて空にせよ」「空になるまで盃を傾けよ」turn down a Glass till it becomes empty の意味と解釈しうる。ただしその場合でも、「空の盃つげよなみなみ」という小林訳が不適切である

ことに変わりはない。

右の見本から窺われるように、小林訳は一部に問題[35]があるものの、全体としては七五調を基本とした、蒲原有明（一八七五―一九五二年）の訳詩の伝統を汲む作品となっていると言えるだろう。

（3） 辻潤譯「ルバイヤット」

増野三良譯の翌一九一三（大正二）年三月には、同じ『朱欒』誌上に評論家・辻潤（一八八四―一九四四年）の「ルバイヤット」五十首が掲載された[36]。訳稿末尾に「（つづく）」とあるので、おそらく全訳を意図していたのであろうが、雑誌自体がこの号で終刊になったため、後半は完結せぬまま終わってしまったらしい。

辻は國民英學校や自由英學舎に学び、一九一一年四月に上野高等女學校に英語教師として勤務するが、伊藤野枝（一八九五―一九二三年）との恋愛事件のため一九一二年四月に退職、以後はロンブロオゾ作『天才論』（植竹書院、一九一四年十二月）やトーマス・デクインシイ『阿片溺愛者の告白』（三陽堂書店、一九一八年五月）、マックス・スティルネル『唯一者とその所有（人間篇）』（日本評論社出版部、一九二〇年五月）[37]など多くの翻訳を出す傍ら、後年は放浪生活を続けたことでも知られる。「ルバイヤット」訳は、おそらく上野高等女學校退職後、『天才論』翻訳の最中か、完成直後の時期[38]になされたごく初期の仕事であろう。冒頭に付された簡単な解説のなかで、辻はウマルを「一種の自由思想家」「懐疑家でもあり、快樂派で利那主義者の様でもある」（三〇頁）と規定し、その「簡單な傳紀を讀んだ時、どこかスピノザのおもかげに似通つたところがある様に思はれた」（三一頁）と言う。また、「ルバイヤット」については、「全體を通じては一貫した思想の流れがあるがそのスタンザは一つ一つ獨立して」おり、「それがエピグラム風になつてゐる。僕は極めて亂暴な散文譯を評（ママ）みた」（三二頁）と記している。訳を思い立った理由は何も述べていないが、のちに人生は「形而上的に巨大なる無意味だ[39]」とする虚無思想を抱くに至った辻自身が、「自由思想家」「懐疑家」のウマルの思想に共感した可能性はあるだろう。

まず第12歌の訳しぶりを窺ってみよう。底本はやはり第四版と思われる[40]。

木の下では詩（うた）の卷、酒の瓶（かめ）、パンの塊（かけ）――そうして（ママ）荒野で
歌をうたふおまへが私の傍にゐる。すると荒野もいつかしら
樂園にかわり（ママ）ゆく面白さ！　（三六頁）

自ら「散文譯」と記したように、行替えは行なわずに追い込む形式を取っているが、増野訳とは異なり、解釈自体は正確である。末尾の「面白さ」のような、原文にない一言をときにさらっと付け加えるのも辻訳全体に見られる特徴[41]と言える。一方、第8歌は次のごとくである。

Naishapur（ナイシャプール）でも Babylon（バビロン）でも甘い酒でも苦い酒でもそれは兎

に角生命の酒は刻々にポタリ〳〵と滴れてゆく、生命の薬はひとつひとつに落ちて行くのだ。（三五頁）

Whether at Naishâpûr or Babylon,
Whether the Cup with sweet or bitter run,
The Wine of Life keeps oozing drop by drop,
The Leaves of Life keep falling one by one.[42]

「薬」は「葉」の誤植であろうが、解釈自体に問題はない。「ポタリ〳〵」のごとき散文的な片仮名表記の単語（主として擬音語・擬態語）の多用は、やはり訳詩全体に亘る特徴[43]をなしており、辻が自ら「亂暴な」と評した理由もこのあたりにあるかもしれない。

辻はほとんどの歌を正確に訳しているが、ときには誤訳も見られる。第18歌はその例である。

その昔Jamshydが榮えた御代に酌めども盡きぬ酒盞を乾した宮殿、又獵の名人Bahramが眠りはよし驢馬の蹄に蹴られるとも醒めずと云はれた猛く雄々しい王の住家も今は蜥蜴と獅子との宿に變つてゐるといふではないか。（三八頁）

They say the Lion and the Lizard keep
The Courts where Jamshyd gloried and drank deep:
And Bahrám, that great Hunter — the Wild Ass
Stamps o'er his Head, but cannot break his Sleep.[44]

第三・四句は「偉大な狩人であったバフラーム王は、野生の驢馬がその頭を踏みつけてもその眠りを破ることはできない」という現在の状況を述べているにも拘わらず、辻訳はこれを過去の描写と誤解してしまった。こうした例は他にもいくつか指摘できる。[45]

二　片野文吉譯『ルバイヤット』

一方、大正期にはフィッツジェラルド訳を媒介としない、新たな『ルバイヤート』邦訳が二種類現われた。その一つが、マッカーシーJustin Huntly MaCarthy（一八六〇／一―一九三六年）[46]によるペルシア語版からの英訳[47]に基づくオオマア・ケエヤム原著／片野文吉譯『ルバイヤット』（開文館、一九一四年三月）[48]、他の一つが、ヘロン＝アレンEdward Heron-Allen（一八六一―一九四三年）校訂のペルシア語ボドレー写本からの荒木茂「オムマ、ハヤムと「四行詩」全譯」である。ここではまず前者を紹介してみよう。

マッカーシーは、一八八四年から九二年まで下院議員を務める傍ら、多くの著作を残したアイルランド出身のイギリスの政治家である。『ルバイヤート』英訳序文によれば、彼は友人の作家・詩人メアリー・ロビンソンAgnes Mary Robinson（一八五七―一九四四年）――同訳出版の前年、フランスのペルシア語学者ダルメストテールJames Darmesteter（一八四九―一八九四年）夫人と

なる――から借りたフィッツジェラルド訳に魅了され、これを暗記するほどまで読み込み、ついには自らペルシア語を学んで、ホワインフィールドの英語対訳版やニコラの仏語対訳版[49]をもとに、長い時間をかけてこつこつと散文訳を作り続けていった。自学自習のペルシア語の知識は「乏しい」beggarly (p. X) ものでしかなかったので、おそらく英訳や仏訳を参照しつつ、「厳密な逐語訳」hard and fast literal translation を目指すのではなく、散文訳によって「詩人が意図した意味を、自分に理解しえた範囲で伝えようと努めた」(p. XI) のだという。

この英訳版を和訳した片野文吉（一八八四―一九一三年。号は脱生）は、水戸の出身で慶應義塾大學部文科に学び、卒業を目前にして結核のため夭折した哲学者である。本書の「小傳」によれば、彼の『ルバイヤート』への関心の端緒は、慶應義塾の外国人教師クラーク[50]によるフィッツジェラルド訳『ルバイヤート』の講義にまで溯る。彼がクラークからマッカーシー訳を借覧し、「拮据勉勵、數年を經て、其の飜譯を大成するに至」（六頁）ったのは一九一三年四月のことであった。もっともそれ以前、病気のため一旦戻っていた水戸で自ら発刊した週刊新聞『水戸タイムス』の文藝欄にも、『ルバイヤート』訳の一部を掲載していたらしい。原稿は與謝野寛の斡旋で、訳者の逝去（一九一三年五月）の翌年三月に遺著として刊行された。

本稿末尾の付表に示すように、マッカーシー訳全四百六十六首はすべて、ニコラ版ないしホワインフィールド版を底本にしている。ただし、これらには他の詩人に帰せられた作品も多く、[51]またルバーイーの韻律以外の作品[52]も含まれているため、全体をウマル・ハイヤーム作と称するのは現代の知見からすれば難しい。また、同一の原詩からの二通りの散文訳が重複して収録されている場合[53]も見られる。しかし片野訳は、これまで日本で知られていなかった多くのルバーイーを初めて紹介した点で歴史的な意義を持っている。訳しぶりの見本として、フィッツジェラルド訳第12歌に対応するマッカーシー訳第449歌と片野訳とを掲げてみよう。

> Give me a flagon of red wine, a book of verses, a loaf of bread, and a little idleness. If with such store I might sit by thy dear side in some lonely place, I should deem myself happier than a king in his kingdom. (p. CL)

> 我に赤き酒の瓶と、歌の本と、パンの一片と、僅かばかりの怠惰とを與へよ。我若し斯くの如き貯蓄を以て、或寂しき場所に於て、汝の親愛なる傍に坐するを得ば、我は彼の王國に於ける王者よりも、我自身を幸福なりと思ふことを得べし。

マッカーシー訳第449歌の原拠は、ニコラ版の第四百十三番、ホワインフィールド版の第四百五十二番である。

> tong-ī mey-e la'l khāham-ō dīvān-ī
> sadd-ē ramaq-ī bāyad-o neṣf-ē nān-ī
> v-āngah man-o tō neshaste dar vīrānī

khoshtar bovad-az mamlakat-ē solṭān-ī[54]

ルビーの色した一壺の酒と一巻の詩集が私は欲しい
命を繋ぐ糧と半切れのパンがあればよい
それから私とあなたが曠野に座せば
それは王者の王国よりも好もしい

マッカーシー訳は、原詩の「私は欲しい」khāham,「あればいい」bāyad などをすべて「与えよ」Give と命令形で一括し、後半は原詩の仮説法現在形「より好もしい（だろう）」khoshtar bovad を仮定法過去の条件節＋帰結節の組み合わせ「もし坐せば……より幸福と見做すだろう」If I might sit . . . I should deem myself happier の形に再構成することで文意を明確にしている。自ら述べる通り「厳密な逐語訳」ではないが、原詩の意図は正確に汲み取って訳していると評せるだろう。ただし、原詩の「命を繋ぐ糧」sadd-ē ramaq-ī を「無為」「怠惰」idleness と訳したのはあまり適切ではない[55]。片野訳はマッカーシー訳のほぼ忠実な訳文になっているものの、「貯蓄」store が判りにくいことや、「彼の王國に於ける王者」a king in his kingdom のような直訳の結果、代名詞「彼」が指示対象語「王者」より前に出てしまって、日本語として不自然な印象を与える点は問題かもしれない。

他方、フィッツジェラルド訳第12歌のもう一つの原拠となった、ボドレー写本第百五十五番に対応するのは、ニコラ版の第四百四十八番、ホワインフィールド版の第四百七十九番である。これをマッカーシー訳第398歌は次のように訳している。

When the hand possesses a loaf of wheaten bread, two measures of wine, and a piece of flesh, when seated with tulip-cheeks in some lonely spot, behold such joy as is not given to all sultans.
(p. CXXXIII)

手に小麥（こむぎ）のパンの一塊（ひとかたまり）と、酒の二合と、魚（うを）の一片とを持ちたる時、鬱金香（うつこんかう）色せる頬（ほ）の少女（をとめ）と共に寂しき場所に坐したる時、見よ、斯くの如き歡樂は凡ての王者（わうしや）にも與へられざるなり。

gar dast dehad ze-maghz-e gandom nān-ī
v-az mey do man-ī ze gūsfand-ī rān-ī
bā lāle-rokh-ī neshaste dar vīrānī
ʻaysh-ī bovad-īn na ḥadd-e har solṭān-ī[56]

もしも手が、小麦粉のパンと
二マンの酒、それに羊の腿肉を与えてくれ
チューリップの頬した友と一緒に曠野に座すのなら
それはどんな王者にも達しえない愉楽となるだろう

原詩の「マン」man は重量単位で、イランでも時代や場所によってほぼ八百グラムから三キログラムまで幅がある[57]。マッカーシー訳はそうした術語を避けて「二杯」two measures とし、片野はこれを「二合」と訳す。「チューリップの頬した友」lāle-rokh-ī[58]は、美女とも美少年とも解釈可能だが、マッカーシーは

あえて特定しないのに対し、片野訳は「少女」とする。[59] いずれも原詩の意味を比較的よく伝えているものの、英訳の「肉」flesh を片野が「魚」としたのは、“flesh” を “fish” と読み違えたためであろう。片野訳にはこの種の不注意な誤読が少なくない。

全般にマッカーシー訳は宗教や歴史に関する術語や固有名詞などを一般的な単語に置き換えたり省略したりする傾向にあるほか、[60] 原詩中の言葉の別の単語への置き換え、[61] 大幅な改変、[62] 明らかな誤読[63]などが多く見られる。とくに、原詩と意味が逆転している場合があるのは問題であろう。第457歌の後半はその例である。「汝」you とはここでは神を指している。

If from the first it was your purpose to abandon me, why did you fling me helpless into the middle of this world? (p. CLIII)

若し最初より我を棄つることが「汝」の目的なりとせば、何故に「汝」は我を助けなく此世の眞中に抛り出せしや。

このままでは英訳も邦訳も論理が破綻して文意が通じがたいが、ペルシア語原文を見ると、

chon tark-e man-at na-būd az rūz-e nakhost
sar gashte be-ʻālam-am cherā mī-kardī[64]

私を見捨てることが（創造の）最初の日から（の意図）でなかったのなら
なぜあなたは私を世界で当惑させたのか

とあって、本来は “it was *not* your purpose” と否定形になるべきであったことが判る。[65]

一方、片野訳は全般に英訳を忠実に訳そうとしているものの、先に挙げたような誤読が随所に見られるほか、[66] 明らかな誤訳も指摘できる。第451歌後半は意味が原詩と正反対になっている例である。

If you would fain taste the joys of riches, then thank Providence for your poverty. (p. CLI)

汝若し富貴の喜びを味はんと欲せざらば、汝の貧窮なることを上帝に感謝せよ。

mī-bāsh be-vaqt-e bīnavāʼī shāker
tā ʻāqebat-ol-amr navā-ʼī yābī[62]

貧困の時に感謝の心を持て
最後に（来世で）富裕を得られるように

来世で天国に住まい、安楽を得るためには、現世で貧困であることに感謝すべしというのが原詩の意味である。英訳はニコラ版の仏訳 “la Providence” に引かれたためか、原詩にない “Providence” を付加しているものの、訳自体は間違っていない。ところが邦訳は「欲せば」とすべきところを「欲せざらば」と逆に訳したことが判る。おそらく、「現世において富貴を望まないな

ら、貧困を神に感謝せよ」という形で論理的整合性を図ったのであろう。

第448歌後半も誤訳の例である。

I would that God blotted my name from the roll of life, or of his bounty made life seem more fair. (p. CL)

我は「神」が生命の記録若しくは人生をして一層公平に見えしめし彼の恩惠の記録より、我名を抹殺せんことを願ふ。

邦訳はこのままではそもそも意味が不明である。対応するペルシア語原詩は次のようになっている。

yā nām-e man-az jarīde bīrūn konadī
yā rūzi-ye man ze gheyb afzūn konadī (68)

（神が）帳簿から私の名前を削除して下さるか、あるいは
不可視界から私の日々の糧を増やして下さるか、いずれかを（私は希望する）

「帳簿」jarīde とは、神が最後の審判の日に個々の人間の現世における善行と悪行を調べるための記録であろう。英訳は「神が私の名前を人生の巻物から削除するか、あるいはその寛大な恩恵によって人生をもう少し公平なものに見せて下さるか、そのいずれかだったらよかったのに」という趣旨なので、原詩の意味はほぼ汲んでいる。邦訳は“of his bounty”を“of life”と同格、つまり“the roll of his bounty”と繋げて読んだため、日本語として理解不能になってしまった。

第436歌の邦訳も意味が判りにくい。ペルシア語原詩と並べて示してみよう。

O evil-doer, never doing good, who seek shelter with divinity, beware of trusting to be pardoned, for the nothing-doer resembles not the doer any more than the doer represents the nothing-doer. (p. CXLVI)

おゝ悪を爲す者よ、決して善を爲さざる者よ、「神性」を避け所として求むる者よ、心して赦罪を得たりと信ずる勿れ、そは無爲者は、有爲者が無爲者に現はすより以上には、有爲者に類似せざるなればなり。

ey nīk na-kardē o badī-hā kardē
v-āngāh be-lotf-e ḥaq tavallā kardē
bar ‘afv ma-kon takye ke hargaz na-boyad
nā-karde cho karde karde chon nā-kardē (2)

おお善をなさず悪をなす者よ
それから神の慈悲にすがる者よ
赦しを当てにするな、なされなかった事柄はなされた事柄と同じではなく
なされた事柄はなされなかった事柄と同じではないから

マッカーシーは、おそらくニコラ訳（celui qui . . .）に引かれて「なされなかった事柄」nā-kardeを「無為者」nothing-doer,「なされた事柄」kardeを「有為者」doerと意訳した上、「無為者が有為者に似ていないのは、有為者が無為者を代表しない（＝似ていない）のと同様である」と全体を訳している。ところが邦訳は、「Aでないのは Bでないのと同じ」not A any more than Bという構文を把握しそこねるとともに、“represent”（代表する）を「現わす」と訳したために意味が不明になっている。

このように、現代の眼で振り返ると、マッカーシー訳、片野訳ともそれぞれ問題を抱えてはいるものの、フィッツジェラルド訳とは異なるルバーイーをきわめて多く日本に紹介した点では重要な意義を持っている。興味深いのは、増野三良が『未來』第二輯に「故片野文吉氏のルバイヤットを評す」[70]と題した書評を掲載していることである。彼は同書が「僕のやうなカイヤウム宗の Fanaticism に墮した痴兒にとつて狂歡」（一五六頁）であり、「君の如き篤學温厚の「ウマルが新使徒」を喪ふたことを私は衷心からふかく哀しむ」（一六四頁）とともに、「近い内「ケガンポウル」飜刻にかゝる東方叢書のうちのルバイヤット原詩（MSS.）が手許に届くから改めて責任ある批許（ママ）を捧げたい」（一六〇頁）、「君がもし存命であるならば多日（ママ）出版する私の「ルボウイヨオト」の批評をして頂き」（一六四頁）たかったとの希望を述べる。「東方叢書」とは、ホワインフィールド対訳版を指しており、先に引いた幡谷正雄の「はしがき」に「三良さんの枕頭にはウインフイールド、その他の英譯本もあつた」と記されていたように、後日、増野は実際にこの刊本を入手していたことが判る。ただ、残念なことに、ホワインフィールド訳を参照しつつマッカーシー訳、片野訳を批評するだけの時間は彼には残されていなかった。[71]

三　荒木茂「オムマ、ハヤムと「四行詩（ルバイヤット）」全譯」

片野訳の七年後に発表された荒木茂訳[72]もまた、日本における『ルバイヤート』の最初のペルシア語原典訳として重要な歴史的意義を持っている。荒木茂（一八八四―一九三二年）は福井の出身で、東京高等師範學校を退学後、ロサンゼルス市立高校、カリフォルニア大学を経て一九一四年九月にコロンビア大学入学、翌年五月に修士号を取得、引き続き一九二〇年三月まで、ジャクソン A. V. Williams Jackson（一八六二―一九三七年）やヨハンナン Abraham Yohannan（一八五三―一九二五年）に師事してペルシア語の研究に従事した。[73]おそらくわが国最初のイラン学者であろう。在米中に中條百合子と結婚、一九二〇年の帰国後は、女子學習院教授を務める傍ら、東京帝國大學文學部でも一九三一年まで講師としてペルシア語を講義、古代から近世までを通覧した『ペルシヤ文學史考』（岩波書店、一九二二年五月）[74]を刊行している。自らの不幸な結婚を題材とした百合子の小説『伸子』（改造社、一九二八年三月）では、荒木（佃一郎）は融通の利かない不器用な人物として批判的に描かれる一方、一九二六年から二年間、荒木ペルシア語教室に参加したアラビア学の前嶋信次（一

九〇三―八三年）は、ずっと温情の籠った回想を残している。[75]

荒木は訳詩の前に詳細な「序」を付し、「四行詩」の写本と翻訳、ウマルの生涯と作品について紹介する。彼はフィッツジェラルド訳の「英詩の美を否定しない」（二頁）ものの、そのペルシア語原文との乖離を遺憾とし、「最も信頼するに足る」原文（ボドレー写本）によるヘロン＝アレンの校訂版と、「多少の誤謬がある」（三頁）その英訳とに基づき、「原作の一行に表はされて居る意味を、予も亦譯文の一行中に、總て含めて書いた」（一四頁）という。「序」の末尾では、

予は幸にして、ペルシャ人で歐米に學び、拾數ケ國の國語に通じて居るヨハナン博士に接し、親しく彼等の風習を學びし事數年、此等の四行詩の飜譯に際しても、彼より多くの暗示（サゼスチヨン）を得たのであるが、微力ながら予はオムマに忠實なる譯者であることを信じて憚らないのである。（一四頁）

と記して翻訳への自負を示す一方、ペルシア語の美を「日本語にて表し得ない」ことは「深く遺憾とする」とも付記している。

これまでと同様、まずはフィッツジェラルド訳の第12歌に対応する、第百四十九番と百五十五番[76]の訳を紹介してみよう。

僅かなる紅玉色の酒と一篇の詩集（デイーワーン）を我望む
　我只生きん爲めに半塊のパンを要するのみ、
斯くて爾と我、寂莫（ナイーラーン）に座せば、
　王領を與へられんよりも幸なり。

註釋、此の詩集と云ふ原語は韻字によりアルファベット順に集めたものなり。（四一頁）

一塊の麺麭、一瓢の酒、
　羊の股肉を得て
爾と我、寂莫に座すとき（ママ）
　その喜びを何れの王か遮らん。

註釋、第百四拾九節參照、（四二頁）

これらはいずれも原文に比較的忠実で、日本語として判りやすい訳になっている。前者の冒頭は、通常は“tong-i”と読んで「壺」と訳すところだが、荒木訳はヘロン＝アレン訳に従い、ここを“tongī”すなわち「狭さ」「窮乏」と取って、そこから「僅かなる」a littleという訳を与えている。第二句の原文には「命を繋ぐ糧と半切れのパン」sadd-ē ramaq-ī . . . o nesf-ē nān-ī と二項目が並列されているのに対し、荒木訳は「生きん爲めに半塊のパン」と一まとめにやや意訳する。「寂莫」に付されたルビ「ナイーラーン」は「ウイーラーン」wīrān の誤植であろう。「註釋」はヘロン＝アレンからの転用である。また、後者の最終行「その喜びを何れの王か遮らん」はヘロン＝アレンの英訳“a joy to which no sultan can set bounds”に基づくものと思われるが、原文には「すべての王者が達する範囲にはない」「どんな王者にも達し得ない（愉楽）」na ḥadd-e har soltān-ī とあり、やや原義から逸脱する。

「座す」はサ変動詞なので、「とき」に連なる場合は連体形「座する」とすべきであった。

他方、荒木訳全体を通覧すると、右に引用したように、「原作の一行に表はされて居る意味」を「譯文の一行中に、總て含めて書」くという原則に基づき、文の主語や説明的な語句を省いて簡潔を旨としたためか、そのままでは文意が理解できない訳詩も多い。例えば、第八十一番は、次のように訳されている。

酒僕（サーキー）の大地に放散する盃毎に、
苦しき目に浮ぶ怒恨の火を消さん
榮光（みさかえ）あれ、爾を知る、
千々の憂苦を魂より除くものと。
註釋、苦しみつゝ此の世を去りしものゝ惱み失せんとなり。（二九頁）

har jor'e ke sāqi-yash be-khāk-afshānad
dar dīde-ye gorm ātesh-ē gham be-nshānad
sobḥāna-llah to bād mī-pendārī
āb-ī ke ze ṣad dard del-at be-rhānad (77)

「酌人が大地に灌ぐ一滴一滴が、悲哀の眼のなかの心痛の焔を消す。神に讃えあれ。そなたは酒が、千もの苦しみからそなたの心を解放する水であることを知っている」というのが原文の直訳である。「大地に灌ぐ一滴」とは、先に触れた「灌奠」、すなわち地下に眠る死者を偲び、その霊を慰めるために大地に酒を注ぐ習慣への言及である。註釋に言う「苦しみつゝ此の世を去りしもの」は「心痛の焔」を抱いているので、酒を灌ぐことで初めてその焔が鎮められる。しかし、荒木訳にはそうした背景説明がないため、「大地に放散する盃」とはそもそも何を意味するのかが読者には不明である。また「榮光（みさかえ）あれ」が神への祈願であることも判りにくい。「爾を知る」は当然「爾は知る」とあるべきところ。おまけに、「千々の憂苦を魂より除く」の主語が酒であることも明示されていないため、文意が通じにくくなっている。せっかくの註釋が生かされず、中途半端な印象を与える一例である。

また、「新現に目を止めよ」(78)、「艶美の還繞に徒歩すること」(79)、「總て科學の精思より高颺し」(80)のように、日本語として意味不明の語句や誤解されやすい表現も散見される(81)。さらに問題なのは、誤訳が少なくないことである。意味が原詩と正反対になっている例を二、三挙げよう。まず第二十三番である。

爾何ぞ斯く罪に泣く、ハヤム、
苦恨は爾に何等の利をも與（ママ）えじ、
贖罪何の爲めぞ、人もし罪を侵（ママ）さずば、
罪は贖はるべし、爾何ぞ罪に泣く。（一八頁）

khayyām ze bahr-ē gonah-īn mātam chīst
va-z khordan-e gham fāyede bīsh-ō kam chīst

ān-rā ke gonah na-kard ghofrān na-bovad
ghofrān ze barāy-ē gonah-āmad gham chīst[82]

「ハイヤームよ、罪のためのこの喪は何なのか。嘆くことに、多かれ少なかれ何の利益があるのか。罪を犯さなかった者に赦しはない。赦しは罪のために生ずる。なぜ嘆くのか」。赦しは罪のためにあるのだから、罪を犯したからといって悲観することはない、というのが一首の意味である。ところが荒木訳は「もし罪を侵(ママ)さずば、／罪は贖はれざるべし」とでもすべきところ、逆に訳したため全体が意味不明になってしまった。

同様に、第八十三番は、以下のごとくである。

友よ、面と面の接する時、
爾友の記憶を増すべし、
俱に豊醇の酒を飲む時、
順に際して玉盃を伏するなかれ。
註釋、伏すると云ふ原語に底を上にするとあり。（二九頁）

この原詩は、フィッツジェラルド訳第101歌との関連ですでに引用した通りである。[83] 後半二句は、やはり大地への「灌奠」の習慣を示唆しているので、「順に際して玉盃を伏するなかれ」では意味が逆で、むしろ「玉盃を（私が眠る大地に向かって）傾けよ」negūnsār konīd とあるべきだったろう。ヘロン＝アレンの英訳も “turn *a goblet* upside down” としている。

もう一例、第百五十番を挙げておこう。

利なき多くの悲憂を食むなかれ、悦に生け(トマ)、
非道、不義の代に公道に生き、
此の世の最終の行動は虚無(ニースティー)なれば
空無を想はず解脱に生きよ。
註釋、行動と譯せる原語は事務と云ふ意を持つて居る。（四一頁）

chandān gham-e bīhūde ma-khor shād be-zī
v-andar rah-e bīdād to bādād be-zī
chon ākher-kār īn jahān nīsti-yast
angār ke nīstī-yo āzād be-zī[84]

原詩には、「かくも無益な悲しみに暮れず愉しく生きよ、不正の道のなかを公正に生きよ、この世は結局無であるから、そなたは自分が無であると仮定して自由に生きよ」とある。荒木の註釋は、ヘロン＝アレンが第三句中の原語 “ākher-kār” の英訳 “the final end” 中の単語 “end” に付した注 “Literally, ‘business’ ” をそのまま利用したのであろう。確かに “kār” の原義は「仕事」である。“ākher(e)-kār” は「結局のところ」という副詞にも、「事柄の結末、終局」という名詞にもなりうるので、ヘロン＝アレンは後者に従って第三句を「この世の結末は虚無である」ākher-kār-e īn jahān nīsti-yast と解釈し、荒木訳もそれを踏襲している。問

題は第四句「空無を想はず」である。おそらく荒木は“nīstī”を第三句中の“nīstī”と同一の名詞「無」と解したのであろうが、実際にはここは名詞“nīst”（無）と、動詞“būdan”（～である）の現在形第一変化二人称単数“ī”とが繋がった形で、「そなたは無である」を意味する文である。元来は「空無（なる）を想ひ」とでもすべきところ、逆に訳されていることが判るだろう。

こうした例に限らず、荒木訳には誤訳が相当見られる[85]。これは、荒木が師事したジャクソンが『アヴェスター』など古代イラン語の専門家であり、荒木自身の主たる関心もアヴェスター語やパフラヴィー語といった古代・中世イラン語にあって、『ルバイヤート』の記された近世ペルシア語はむしろ専門外だったこととも関連するかもしれない。読解にさいし、ヨハンナンに助力を求めたのもそのためであろう。また彼は、「譯詩中、片假名の振假名は、原語のペルシャ音に最も近き發音を示し」、「オムマ、ハヤムが最も原音に近きものと信じて斯く彼を呼ぶ」（一四頁）とするが、現代の時点で振り返ると――当時は先例となるべき仮名表記の基準がまったく存在しなかったという事情を勘案すべきだとはいえ――問題が多いと言わざるをえない[86]。荒木訳は、ペルシア語原詩の趣を初めて日本語で読者に伝えたという点で歴史的意義が大きく、矢野峰人のような研究者によって参照される[87]反面、その難解さのためにかえって一般読者を『ルバイヤート』から遠ざけてしまったかもしれない。

それでも、歌人の赤木健介（本名は赤羽壽（ひさし）。一九〇七―八九年）が、

（前略）私は少年時代に、「中央公論」か何かで、「ルーバイヤット」の飜譯を讀んだ記憶がある。譯者は中條百合子氏の最初の夫君荒木茂氏だつたと思ふ。其の高趣はわからなかつたにしても、酒と薔薇と新月を讃へた其の詩篇は、「千一夜物語（アラビアンナイト）」そのままに魅惑的であつた。以來オマールの名は、胸に消し難く刻まれたが、不幸にして接し得る機會を持たなかつた。（中略）間もなく齋藤勇（たけし）氏（一八八七―一九八二年。英文学者）を訪れた機會に、版本について種々教へられ、鮮美な一册を見せて頂いた外、「オマールを讀みたいなら、矢野（峰人）君の校註本が至廉で、且つ正確である。」との教示を得た。（中略）而して再讀・三讀ますます心惹かれ、もつと早く觸れなかつたことを後悔するばかりである[88]。

と述べているように、荒木訳がきっかけとなって、彼が『ルバイヤート』をゲーテの『西東詩集』や中国の漢詩人、日本の『萬葉集』や記紀歌謡と並べて論じた書物を上梓するに至ったことは忘れるべきではないだろう。

大正期にはこのほか、竹友藻風の『ルバイヤット』全訳や、小川忠藏による評釈、厨川辰夫・矢野禾積編の『十九世紀後半期英詩選』（邦題は『英詩集』）などの仕事が現われる。これらについては、紙幅の関係で別稿に譲ることとしたい。

［注］

＊ 本文における引用文中、引用者の注記・説明を示す丸括弧は

小字（1ポ下げ）とし、原文自体の丸括弧は並字で表示する。また、引用文中の引用者によるルビには丸括弧を付し、原ルビと区別した。ブラケット［　］は引用者による補足である。

＊ 引用欧文中の three dots (. . .) は引用者による省略を示す。

（1） 『朱欒』第二卷十一號、一九一二年十一月、四五―五五頁。増野は同じ号に「埃及に於けるヘロドタス（From Andrew Lang）」、第二卷九號に「Mandoline（ボウル・ヴエルレーヌ）」、十號に「青磁古甕の歌（Lang の Ballades より）」、第三卷五號に「印度古詩」などの訳詩を発表している。増野の業績については、以下に詳しい。佐野晴夫「生田春月と山陰の詩壇（1）」『山口大学教養部紀要　人文科学篇』第十八巻、一九八四年十一月、一一九―二五頁、同「生田春月と山陰の詩壇（2）」『山口大学教養部紀要　人文科学篇』第十九巻、一九八六年二月、一三一―三四頁（いずれも「増野三良著作年表」を含む）。

（2） 大正四年十一月調『早稲田大學交友會會員名簿』一六五頁。友人による回想として、松本淳三「外の浦より――増野三良を憶ふ〔一―四〕」『讀賣新聞』一九二二年七月二十二日、第十一面、二十三、二十五―二十六日、第七面。前田夕暮「増野三良氏を悼む」『詩歌』第六卷四號、一九一六年四月、四三頁。

薄田泣菫「さすらひ蟹」（同『艸木虫魚』創元社、一九二九年一月、四一―四六頁）には、増野が「生前オマア・カイヤムやタゴオルの譯者として知られてゐたが、そんな飜譯よりも彼自身のものを書いた方がよかりさうに（ママ）思はれるほど、詩人の氣稟に富んだ男だつた」とある。また、『未來』第二年二號（一九一五年二月）の三木露風「餘錄」は「同君は病餘のすさみに書いた畫五十點を集めて、京都で展覽會を開く」（一〇五頁）とも記しており、絵心もある詩人だったようだ。未來社同人編『日本象徴詩集』（玄文社、一九一九年五月）には、増野の作品として日本語詩「De Profundis」のほか、“To R. M.,” “On the Voyage,” “Her Sérénade” の三編の英詩が収録されている。

（3） それぞれの原著は以下の通り。

・Rabindranath Tagore, *Gitanjali (Song Offerings)*, A Collection of Prose Translations Made by the Author from the Original Bengali, with an Introduction by W. B. Yeats, London: Macmillan and Co., 1913.

・――, *The Crescent*, Translated from the Original Bengali by the Author, with Eight Illustrations in Colour, London: Macmillan and Co., 1913.

・――, *The Gardener*, Translated by the Author from the Original Bengali, New York: Macmillan and Co., 1913.

詩人の金子光晴（一八九五―一九七五年）は後年、「タゴールの『新月』という詩のほんやくをよんで感心したことがありました。増野三良とかいう人の訳でね」と回想している。金子光晴『新雑事秘辛』濤書房、一九七一年六月、六三頁。初出は「詩と詩人について（中）――あいなめ談義その4」『詩誌あいなめ』第十八号、一九六七年八月、四頁（「ありました」→「あったですよ。ずいぶん読んだ」）。『金子光晴全集』第六巻、中央公論社、一九七六年三月、二四八頁。

（4） 増野三良「カシイダア（亞剌比亞詩集）」『詩歌』第五卷九號、一九一五年九月、六六―六七頁。同「アラビヤ詩集カシイダア」『詩歌』第五卷十二號、三八―四〇頁。原典は、探検家・東洋学者として知られるバートン Richard Francis Burton（一八二一―九〇年）がペルシア詩人の名を借りて創作した英語詩。その初刊情報は以下の通りで、その後多くの刊本が出されている。

・*The Kasîdah (Couplets) of Hâjî Abdû El-Yezdî: A Lay of the Higher Law*, Translated and Annotated by His Friend and Pupil F. B., London: Privately Printed, 1880.

（5） 増野良三「波斯だより」『生活と藝術』第三卷三号、一九一五年十一月、四六―五三頁。

（6）その訳文から第三版ないし第四版が候補となるが、第五歌の三行目に「紅玉（ルビー）の燭（ともしび）を點じ」とあるので第四版が底本と判断できる。これに対応する原文が、第三版は“a Ruby gushes,”第四版が“a Ruby kindles”と異なるためである。

（7）『讀賣新聞』一九一四年二月一日、朝刊第五面「よみうり抄」。『未來』第一輯（一九一四年二月）の「消息」三七二頁にも、「増野三良の『ルバイヤット』は近刊の豫定」とある。また、一九一三年七月十九日の三木露風（本名は操。一八八九―一九六四年）宛て増野書簡は、「杉浦非水氏の肝煎にて九月上梓目下原詩譯校正中」と伝え、「或は東方的冥想或は御天分の象徴詩または書簡文體のもの何れにてもよろしく」「是非共ルイバヤット（ママ）に何か書いて戴」きたい、「一病兒の經帷子として是非共大兄の跋を。序は上田敏先生に候」と露風に跋文を依頼している。しかし、同年八月九日付け書簡では「尊兄「白き手の獵人」御上梓につき御正定を攪拌する愆（けん）深きを思ひ『跋』催促も遠慮致しました」とあり、露風の「跋」が最終的に書かれたのかどうかは不明。「増野三良書牘（一）」『詩歌』第六卷六號、一九一六年六月、六一―六二頁。

前掲の松本淳三「外の浦より〔三〕」によると、杉浦非水（本名は朝武（つとむ））。一八七三―一九六五年）はかつて増野の故郷・濱田に中学教師として赴任し、増野らの詩歌雑誌『銀鈴』の表紙を描いていたという。富本憲吉（一八八六―一九六三年）は『幼兒詩集　新月』の装丁も手がけている。

（8）故増野三良譯「ルバイヤット」『イギリス文學』第一卷二號、一九二九年二月、四四―四五頁。故上田敏校閲・故増野三良譯稿「Rubáiyat of Omar Khayyám」『イギリス文學』第一卷四號（世紀末英文學號）、一九二九年四月、五七―五九頁。「Rubáiyat of Omar Khayyám」同、第一卷五號（ロゼッティ號）、五月、四三―四五頁。目次題はいずれも「ルバイヤット」。

第四號にはジェイムズ Gilbert James（一八六五―一九四一年）のフィッツジェラルド訳初版第5歌への挿絵、第五號にはバルフォア Ronald Balfour（一八九六―一九四一年）の同初版第11歌への挿絵を付す。ジェイムズの挿絵は、注（33）で後出のニコルソン注釈版のために描かれた作品。バルフォア版の書誌は以下の通り。

・*Rubáiyat of Omar Khayyám*, Illustrated by Ronald Balfour, London: Constable and Company Limited, 1920.

（9）『イギリス文學』第一卷二號、四四―四五頁。「ウインフィールド」は、イギリスの東洋学者 Edward Henry Whinfield（一八三六―一九二二年）のこと。その校訂にかかるペルシア語・英語対訳版の初刊本は *The Quatrains of Omar Khayyám*, the Persian Text with an English Verse Translation, by E. H. Whinfield, London: Trübner & Co., 1883. 第二版は London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co., 1901. いずれも Trübner's Oriental Series. 初刊は五百首、第二版は五百八首を収録。本書は以下 Whinfield と略記。

（10）第一歌のみ初版本に拠っているが、そこに増野は「フィッツジェラルドの讃美者たちは、一八五九年の初版にしか見られぬこの四行詩にホメロス的な輝きがあるという点で明確に合意していた」Admirers of Fitzgerald (sic) are definitely agreed that there is a Homeric splendour about this quatrain as first printed in 1859, Which (sic) is not found in any of the later variants（『イギリス文學』第一卷二號、四五頁）という英語の注記を付している。これは、以下の刊本に付されたドール Nathan Haskell Dole（一八五二―一九三五年）の序文に基づくものと思われ、増野が用いた底本を推定する手がかりとなる。

・*Rubáiyát of Omar Khayyám*, Rendered into English Quatrains by Edward FitzGerald: A Reprint in Full of the First Edition, 1859, of the Second Edition, 1868, and of the Fifth Edition, 1889, Together with Notes Indicating the Minor Variants［Found in the Third, 1872, and in the Fourth, 1879］, Printed under the Editing of Na-

than Haskell Dole, Boston: L. C. Page and Company Incorporated, 1899, p. 18: Many lovers of Omar prefer the second redaction to any other, though probably there is no one who does not think the first quatrain of the First edition in its Homeric splendour is vastly superior to its later variants.

(11) 『イギリス文學』第一巻四號、五九頁の幡谷による「附記」に「この譯稿は上田敏博士が校閲せられたものであることを述べておいたが、博士の手許にこの譯稿が永い間あつたことを目擊した人もいくたりかはある」と記されている。矢野峰人「RUBAIYAT の研究」『英語青年』第五十四卷二號、一九二五年十月十五日、四一頁「亡くなつた出野青煙氏から生前直接に聞いたところによると、故増野三良氏にも Rubaiyat の邦譯あり，上田敏博士の序文を貰ふためにその原稿が久しく先生の手許におかれてゐたといふ」。

(12) 『鷗外歴史文學集』第十三巻（漢詩〔下〕）、古田島洋介注釈、岩波書店、二〇〇一年三月、一六一―六二頁。同書に示されるように、鷗外の『日記』一九一五年十二月十五日条に「題波斯詩卷の詩を横川德郎に寄示す」とあり、同二十日条に「増野三良に復す」として本詩を記す。底本は『鷗外全集』第十九巻（岩波書店、一九七三年五月）の「漢詩」六〇四頁。『日記』は、同全集第三十五巻（一九七五年一月）、六七九頁。

なお、この七言絶句と『日記』の記事については、つとに森亮「日本におけるルバイヤット」（『英語青年』第百十九巻十一号、一九七四年二月一日、六七七頁。のち、森亮『夢なればこそ』〔文華書院、一九七六年十二月〕、一一一―一二頁、オーマー・カイヤム／森亮訳『ルバイヤット』〔クラテール叢書3、国書刊行会、一九八六年十二月〕、一五六頁に再録）に指摘がある。「増野が同郷の大先輩である鷗外に訳稿を見せて序文を求めたのに対して、鷗外がその時分折々したように七絶で間に合せたのであろう」という。ちなみに鷗外文庫には、「謹呈／森鷗外様　譯者」と献辞の記された増野譯『幼兒詩集　新月』が収められている。

(13) 小川環樹注『蘇軾――蘇東坡』上、中國詩人選集第二集5、岩波書店、一九六二年三月、一〇九、一一一頁（「呂梁の仲屯田に答う」、原漢文）。小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集』第四冊（巻十四～巻十六）、筑摩書房、一九九〇年九月、四〇三、四〇六頁。日本語訳は前者による。引用にさいし、訓み下し文のルビは省略。原詩は馮應榴輯訂『蘇文忠詩合註』五十卷、卷十五所収、一〇七七年作。

(14) 「ルーバアイーヤウト」五〇頁。

(15) Edward FitzGerald, *Rubâiyât of Omar Khayyâm: A Critical Edition*, Edited by Christopher Decker, Charlotteville and London: University Press of Virginia, 1997, p. 97. 本書は以下 Decker と略記。

(16) 矢野峰人「RUBAIYAT の研究（第六回）」『英語青年』第五十四巻七號、一九二六年一月一日、二〇八頁。矢野禾積『近代英詩評釋』三省堂、一九三五年二月、一〇六頁。明示的な条件節を持たない、独立した文に用いられる古い形の仮定法過去（subjunctive past）であろう。井上義昌編『詳解英文法辞典』開拓社、一九六六年二月、一一五九頁。

(17) 筆者の「明治日本の『ルバイヤート』」（『ODYSSEUS』第二十号、二〇一六年三月）、一〇頁。以下、本稿では同論考を「明治日本」と略記する。

(18) 『イギリス文學』第一巻五號、四五頁。その他、「美酒の瓶（かめ）、糧（かて）の山」→「一瓶の酒と麪包の塊（かけ）」、「君が、」→「爾（おまへ）が」、「居る」→「ゐる」、「ああ」→「あゝ」とした上で、第一行末の読点は句点に改め、第二行末の読点は削除する。

(19) *Edward FitzGerald's Rubâ'iyât of Omar Khayyâm, with Their Original Sources*, Collated with His Own MSS., and Literally Translated by Edward Heron-Allen, London: Bernard Quaritch, 1899, pp. 22–25. 本書は以下、Heron-Allen 1899 と略記。

(20) 「ルーバアイーヤウト」四九頁。

(21) Decker, p. 97.

(22) 矢野峰人「RUBAIYAT の研究（第六回）」二〇八頁。矢野禾積『近代英詩評釋』一〇五頁。*The Golden Treasury of the Best Songs and Lyrical Poems in the English Language*, Selected and Arranged by Francis Turner Palgrave, with Additional Poems and with Notes by C. B. Wheeler, London: Oxford University Press, 1921, p. 693: Some verb like 'lie' must be supplied before 'With me.'

(23) 「マフムード」はガズナ朝のスルタン・マフムード Maḥmūd Ghaznavī（在位九九八―一〇三〇年）のこと。第六十歌にフィッツジェラルドの注がある。二行目の「沙漠と耕地」は、のちにイギリスの女流探検家ガートルード・ベル Gertrude Lowthian Bell（一八六八―一九二六年）のシリア旅行記の副題の発想源となった。*Syria: The Desert and the Sown*, London: William Heinemann, 1907, p. 23（田隅恒生訳『シリア縦断紀行』1、平凡社東洋文庫、一九九四年十二月、五四頁）。T・E・ロレンス『智恵の七柱』には、第五章の「砂漠と耕地の接する所」the meeting of the desert and the sown をはじめ、ベルの副題を踏まえた類似の表現が何度か用いられている。J・ウィルソン編／田隅恒生訳『完全版知恵の七柱』1、平凡社東洋文庫、二〇〇八年八月、七七頁および三五七頁訳注11。T. E. Lawrence, *Seven Pillars of Wisdom: A Triumph*, The Complete 1922 Text, [Salisbury]: Castle Hill Press, 2003, p. 19.

(24) 『イギリス文學』第一巻五號、四五頁。

(25) 見本として第10歌までの誤訳の例を以下に示す。矢印の直後は『イギリス文學』で修正された訳。斜線は原文の改行。

・第2歌「病み衰へた未明の妖精」the phantom of False morning
→「「虚妄（いつはり）の曉」の幻影（まぼろし）」。
「何時寺といふ寺に祈禱の支度が出來るのか」When all the Temple is prepared within →「神殿の中がすつかり支度されてゐるのに」。＊接続詞 When を疑問詞と誤解する。

・第6歌「天上界に、／パーラビイは「酒よ、酒よ、」とたからかに歌ふ。／きけよ、鶯は（中略）啼いてゐる」in divine / High-piping Pehlevi, with "Wine! Wine! Wine!" / "Red Wine!" — the Nightingale cries →「聖らかな調子の／Pelhevi（パアフラヰイ）語で『酒よ酒よ酒よ！赤い酒！』と――／鶯が（中略）啼いて居る」。＊副詞句の一部を成す「パフラヴィー語」を主語と誤解する。

・第7歌「汝の悔恨の冬の衣は投ぜられ」Your Winter-garment of Repentance fling →「爾（なんぢ）の悔悟なぞといふ冬の衣を棄てゝしまへ」。＊命令形 fling を分詞と誤解したか。
「「時の鳥」はたゞ飛んで歸（かへ）る術（すべ）を知らず、／見よ、遠くとんでゆく」The Bird of Time has but a little way / To flutter — and the Bird is on the Wing →「「時劫の小鳥」はたゞ飛ぶ術（すべ）しか知らない――／小鳥は飛んで居る」。＊"The Bird of Time" は時間の推移の比喩。「「時」という鳥はわずかのあいだしか飛ばない。しかもその鳥はもう飛び上がっている」というのが後半の意味なので、『イギリス文學』の改訂版もなお不十分であろう。

・第10歌「何事をなさねばならぬか。／カイコボード大王やカイコーズロ王と」What have we to do / With Kaikobád the Great, or Kaikhosrú? →「俺達は／Kaikobad（カイコボオド）大帝 Kaikhosur（カイクウズロオ）王と何のゆかりがある？」＊成句 have . . . to do with「〜と関係がある」を誤解する。

(26) 小林愛雄『近代詞華集』現代文藝叢書第十八編、春陽堂、一九一二年十二月、一五四―五六頁「酒〔フィツゼラルド譯オマア、カイアムの『ルバイヤット』より〕」。

(27) 第5・6・7・100・101歌。第5歌三行目「さはれ葡萄はいまも熟（な）るルビイの美貫（うまみ）」の「熟る」を "But still a Ruby gushes/kindles in the Vine" の "kindles" の訳語と解釈すれば、底本は第四版になる。

(28) Decker, pp. 82, 110, 227. ちなみに、フィッツジェラルドの依拠

したペルシア語原詩は、ボドレー写本の第五番である。「誰一人明日を保証してはくれないから、／今そなたは恋に悩む心を楽しませるがいい。／月の光の下で酒を飲め、おお月（のような美女）よ、なぜなら月は／幾度探しても我らを見出すことはないだろうから。」chon ʻohde namī konad kas-ī fardā-rā / hālī khosh kon to īn del-ē sheydā-rā / mey nūsh be-nūr-e māh ey māh ke māh / besyār be-jūyad-ō na-yābad mā-rā. 三行目に現われる三つの「月」mah は、それぞれ天空の月、月の美女、そして歳月の月（と天空の月）という異なる意味を担っている。英訳は原詩の趣旨を汲みながら、独自の作品に仕上げられている。

ボドレー写本は、前出の Heron-Allen 1899, pp. 144–47 と併せ、以下を参照した。

・*The Ruba'iyat of Omar Khayyām, Being a Facsimile of the Manuscript in the Bodleian Library at Oxford, with a Transcript into Modern Persian Characters*, Translated, with an Introduction and Notes, and a Bibliography, by Edward Heron-Allen, London: H. S. Nichols, 1898, pp. 122–23. 本書は以下、Heron-Allen 1898 と略記。

（29） 初版（第74歌）では "look / . . . after me — in vain!" とし、第二版（第109歌）は "look / . . . for one of us in vain!" と改める。

（30） Decker, pp. 82, 110, 228. 掲出したのは第四版の本文。第三版は "Sákī" → "Sáki," "joyous" → "blissful" とする。

（31） 厨川辰夫・矢野禾積編『英詩集』積善館、一九二二年三月、p. 136: The wine-glass of a guest who is unable to attend a banquet, is turned down. 矢野禾積（峰人。一八九三—一九八八年）の注釈書『Rubáiyát of Omar Khayyám』（Kenkyusha Pocket English Series, 研究社出版、一九二九年十月）、四七頁も「宴會に不參の客の盃は俯せる事になつて居る故斯く言つたのである」とする。森亮訳『ルバイヤット』九六頁もこの解釈を踏襲する。ただし、この説の典拠は不明。

（32） Heron-Allen 1898, pp. 200–01; Heron-Allen 1899, pp. 146–47. これはホワインフィールド校訂版 pp. 158–59, no. 234, サーデク・ヘダーヤト校訂版（Ṣādeq Hedāyat, *Tarāne-hā-ye Khayyām*, Tehran: Amīr-e Kabīr, 1934). p. 94, no. 83 にほぼ対応する。ヘダーヤト校訂版の邦訳は、小川亮作訳『ルバイヤート』岩波文庫、一九七九年九月改版、六九頁。その第三・四行には「おれのいた座にもし盃（さかずき）がめぐって来たら、／地に傾けてその酒をおれに注（そそ）いでくれ」とある。

（33） この習慣と詩想については、フィッツジェラルド自身も、第三版・第四版の第39歌（第二版第42歌）への注で言及しており、杉田「葡萄樹下の埋葬」（同『葡萄樹の見える回廊』岩波書店、二〇〇二年十一月）、二四一—四九頁に紹介がある。

東洋学者のニコルソン R. A. Nicholson（一八六八—一九四五年）は、フィッツジェラルド訳第三・四版の第101歌に対応する初版第75歌への注で、ホワインフィールド版第二百三十四番を引きつつ、"It is related of the pre-Islammic poet, A'shâ, who was a great wine-drinker, that revellers used to meet at his grave and pour on it the last drops that remained in their cups"（大の酒好きであった前イスラム時代の詩人アァシャーについての伝承によると、酒飲みたちは彼の墓所に集まって、彼らの盃に残った最後の数滴をそこに灌ぐ習慣だったという）と記している。*Rubáiyát of Omar Khayyám*, Translated by Edward FitzGerald, Edited, with Introduction & Notes, by Reynold Alleyne Nicholson, London: Adam and Charles Black, 1909, p. 203. アァシャー al-'A'shā（六二九年頃歿）の伝承については、前掲「葡萄樹下の埋葬」二四二頁および四四七頁注（34）に言及がある。

竹友藻風（本名は虎雄（とらお）。一八九一—一九五四年）は、この第75歌への訳注において右のニコルソン注を引いている。*Longer English Poems*, With Introduction and Notes by T. Taketomo, Kenkyusha English Classics（研究社英文學叢書）、研究社、一九二六年

十月、三三八頁。ただし、彼のオオマア・カイアム『ルバイヤット』（アルス、一九二一年三月、一一二頁）では、第二版第110歌の対応箇所は「飲みほせる盞ふせよ」、戦後の改訳版オーマァ・カイヤム『ルバイヤット』（西村書店、一九四七年八月、一二六頁）では「うつろなる盞ふせよ」とそれぞれ直訳され、後者では「オーマァはその席に列ることが出來ないからである」（一八〇頁）と註が付されている。

（34）石橋幸太郎編集代表『現代英語学辞典』成美堂、一九七三年一月、七二九―三〇頁「予期的賓辞法」。市河三喜編『研究社英語學辭典』研究社、一九五三年十二月、八二五頁「豫期的賓辭法」。後者の引く例を挙げる。He introduced the story among *horrified* audience（その話を聽かせて人々を恐怖さした）。

（35）他に、第7歌の第三・四行「『時』てふ鳥は飛ばむとてわづかの道を／持つものを」は日本語として判りにくい憾みがある。

（36）『朱欒』第三卷五號、一九一三年五月、三〇―四九頁。訳者名は「つじ、じゅん」、目次では「つじ・じゅん」。のち、『虚無思想研究』第六号（一九八五年六月、六―一七頁）に「辻潤全集未収録作品（三）」として再録。

（37）それぞれの原本は以下の通り。

・Cesare Lombroso, *The Man of Genius*, Second Edition, London and New York: W. Scott, 1905.

・Thomas De Quincey, *The Confessions of an English Opium-Eater: Being an Extract from the Life of a Scholar*, Edited with Introduction and Notes by Arthur Beatty, New York and London: Macmillan, 1900.

・Max Stirner, *The Ego and His Own*, Translated from the German by Steven T. Byington, with an Introduction by J. L. Walker, London: A. C. Fifield / New York: E. C. Walker, 1913.

（38）同書の序文「おもふまま」三頁によると、「失業の結果先づ第一に取りかかつたのがこの飜譯」で、「その年の六月から、約三ケ月半ばかりで」訳したという。「失業」が上野高等女學校退職を指すとすれば、「その年」とは一九一二年になる。

（39）辻潤「錯覺自我說」、同『癡人の獨語』書物展望社、一九三五年八月、一六頁。

（40）第5歌「紅玉（ルビー）が光つてゐる」は第二・第三版の“a Ruby gushes”ではなく第四版“a Ruby kindles”に対応している。

（41）他の例を挙げる。「のが聞えないのか」（第6歌）、「よせばいいのに」（第13歌）、「全く冷たい」（第16歌）、「のがきこえないか」（第25歌）、「憎らしさ」（第30歌）、「薄氣呼（ママ）の悪い」（第34歌）、「惜きかな」（第39歌）。

（42）Decker, pp. 97, 126.

（43）他の例を挙げる。「チリ〳〵バラ〳〵に」（第1歌）、「スツカリ」「グヅ〳〵」（第2歌）、「オサラバ」（第3歌）、「ヒツソリと」（第32歌）、「ズツと」「ヅ（ママ）ツと」（第43歌）、「コビリツイテ」（第44歌）、「タツタ」（第50歌）。

（44）Decker, pp. 98, 137.

（45）他の例を挙げる。

・第21歌「明日になれば私は七千年の昨日を背負つてゐる私になるかも知れないのだ」To-morrow I may be / Myself with Yesterday's Sev'n thousand Years →「明日は私自身が過去の七千年の歳月とともにあるだろう＝死者の仲間入りをするだろう」。

・第36歌「その任せた唇を私はどんなに吸ふことだ［ら］う」the passive Lip I kiss'd →「私の接吻を受けた唇」。

・第41歌「酒の神」Misinter of Wine →「酌人」。

・第42歌「吸ふた唇が「全て」の様に始まつてまた終らうとも」the Lip you press, / End in what All begins and ends in →「お前が触れる唇は、万物の始まりでもあり終わりでもある無に帰する」。

・第43歌「暗黑の酒の神」the Angel of the darker Drink →「黒い酒を酌ぐ死の天使」。

・第46歌「帳面」の終りを告げる「存在」を氣づかふな。私のだとて同じこと、なにが解るものでない」And fear not lest Existence closing your / Account, and mine, should know the like no more →「存在者（神）がそなたと私の勘定書を閉じる（善行と悪行の計算を終える、死んで最後の審判に向かう）とき、我々の同類をもはや見なくなる（人類が死に絶える）ことなど恐れるな」。

・第49歌「少しも早くそれはやめた方がいい」quick about it →「急いでそれを行なえ」。

（46）マッカーシーの生年は、電子版 *Oxford Dictionary of National Biography*, "McCarthy, Justin（1830–1912）" では一八六一年（ただし対応する冊子体 *Oxford Dictionary of National Biography*, in Association with British Academy, from the Earliest Times to the Year 2000, Edited by H. C. Matthew and Brian Harrison, 60 vols., Oxford: Oxford University Press, 2004, Vol. 35, pp. 112–14 にはソの情報は欠）、Library of Congress: Online Catalogue では一八六〇年とするなど、複数の説がある。

（47）初刊本＝*Rubaiyat of Omar Khayyam*, Translated by Justin Huntley McCarthy, London: David Nutt, 1889. 抜粋版＝*Quatrains of Omar Khayyam in English Prose*, by Justin Huntley McCarthy, London: David Nutt, 1898. 初刊本は序文や頁番号も含めすべて大文字表記、訳の冒頭（p. I）と最終頁（p. CLVI）のみ各頁二編、その他は各頁に三編ずつ配しているが、歌には番号は付されていない。以下、参照の便宜上、大文字表記は通常の小文字表記に戻し、冒頭から順番に一から四百六十六まで通し番号を付す。なお、片野訳にはその形で通し番号が振られ、歌番号と頁番号が一致している。

（48）エドワアド・クラアク Edward Bramwell Clarke（一八七四―一九三四年）、上田敏、川合貞一（一八七〇―一九五五年）、永井壯吉（荷風。一八七九―一九五九年）の序文、友人の關正雄による「片野文吉君小傳」、與謝野寛（一八七三―三五年）の跋を付し、装丁は故郷の友人である画家・小川芋錢（うせん）（本名は茂吉。一八六八―一九三八年）、本文校定は馬場孤蝶（本名は勝彌。一八六九―一九四〇年）による。クラアク序文は英語原文と關正雄訳を併載。上田敏の序文はのち、『ルバイヤット』序」として『定本　上田敏全集』第九卷（教育出版センター、一九七九年十二月）、三七〇―七一頁に、永井壯吉の序文は、「ルバイヤット序」として『荷風全集』第二十六卷（岩波書店、一九六五年一月）、四三八頁にそれぞれ再録。初刊本の訳詩本文は総ルビだが、以下の引用では適宜省略した。

本書第160歌と第320歌の対面頁には、フィッツジェラルド訳初版によるポガニー Willy Pogany（一八八二―一九五五年）の挿絵二点（第7歌および第75歌の対面頁）が三色版別刷で挿入されている。その原本は以下の通り。

・*Rubáiyát of Omar Khayyám*, Presented by Willy Pogany, London: George G. Harrap,［1909］.

與謝野寛の跋によれば、同書は「故人が愛藏書の一」であったという。ただし、挿絵と歌の内容とは対応していない。

なお本書は、一九三七年六月に龍星閣から新版が出され、そちらには、關正雄による跋が新たに付け加えられた。また開文館版は近年、オマル・ハイヤーム原著／ジャスティン・ハントリー・マッカーシー英訳／片野文吉訳『ルバイヤット』（ちくま学芸文庫、二〇〇八年十二月）として再刊されている。

（49）*Les Quatrains de Khèyam*, traduits du Persan par J. B. Nicolas, Paris: L'Imprimerie Impériale, 1867. 本書は以下 Nicolas と略記。

（50）クラークはのち、京都の第三高等學校や京都帝國大學で教鞭を執る。そこでの講義に列した矢野禾積によれば、「高校・大学・大学院と、引つづいて大変御厄介になつたエドワード・クラーク先生」は「大のフィッツジェラルド好き、オーマー好き」であったため、「私のオーマー熱を煽るのに与つて大に力あつ

た」という。矢野峰人「オーマー・カイヤムの翻訳」「私のコレクション」『日本古書通信』第二十六巻二号、一九六一年二月、二頁。のち、『矢野峰人選集』1（エッセイ・詩・訳詩）、国書刊行会、二〇〇七年六月、三六七頁。

京都帝國大學英文學會発行の『アルビオン』第二巻一號（一九三四年七月）「CLARKE 教授の追憶」に寄稿した人々のなかでも、關正雄「CLARKE 先生の憶ひ出」は、第一高等學校卒業後「その當時はまだ餘り我邦には一般に紹介せられて居らなかつた Omar Khayyám の詩を讀むことを奬められた」（四三頁）と記し、小林象三「CKARKE 先生と私」には「先生がことの外 Omar Khayyám の四行詩を愛讀されたことはよく知られてゐよう。私が大學卒業論文の題目の決定にまどうた時、先生はこの四行詩をまづ始めてみてはどうかと、幾十冊といふ書物や先生の講演の原稿などを貸して下さつた」（五二頁）とある。

クラーク自身は講演原稿として Edward B. Flower Clarke, “A Biographical Sketch of Edward FitzGerald, and Some of His Translations,” *Studies in English Literature*, Vol. 13, No. 4, October 1933, pp. 494–506（のち *Stray Leaves: Essays & Sketchs*（落葉）by Edward B. Clarke, Tokyo: Kenkyusha, 1936, pp. 281–96）を残している。

(51) Arthur Christensen, *Recherches sur les Rubā ʿiyāt de ʿOmar Hayyām*, Heidelberg: Carl Winter’s Universitätsbuchhandlung, 1905, pp. 28–32.

(52) Nicolas, pp. 180–81, no. 365 = Whinfield, pp. 274–75, no. 410 = McCarthy, p. 147, no. 439 は「走調」baḥr-e ramal-e mothamman-e makhbūn-e maḥdhūf.

(53) マッカーシー訳の第 3 歌と第 327 歌、第 30 歌と第 414 歌、第 31 歌と第 379 歌、第 32 歌と第 421 歌、第 33 歌と第 333 歌、第 71 歌と第 403 歌。

(54) Nicolas, pp. 204–05, no. 449; Whinfield, pp. 302–03, no. 452. いずれはボドレー写本の第百四十九番と同一である。「明治日本」一一頁で既出。

(55) この表現については、「明治日本」注（57）に解説がある。

(56) Nicolas, pp. 220–21, no. 448; Whinfield, pp. 320–21, no. 479. ボドレー写本第百五十五番では、第二句 “v-az mey do man-ī” → “az mey kadu-yī,” 第三句 “bā lāle-rokh-ī” → “v-āngah man-o tō,” 第四句 “ī̄n” → “ān” と異同がある。「明治日本」一〇頁で既出。

(57) Walther Hinz, *Islamische Masse und Gewichte*, Leiden and Köln: E. J. Brill, 1970, pp. 17–22.

(58) アイルランドの詩人トマス・ムア Thomas Moore（一七七九—一八五二年）の物語詩『ララ・ルーク』*Lalla Rookh: An Oriental Romance*（一八一七年）では、「チューリップの頬した者」lāle-rokh（古典音 lāla-rukh）がムガル皇帝の娘の名前「ララ・ルーク」Lalla Rookh として利用されている。

(59) ちなみに、ヴェッダー Elihu Vedder（一八八四年）、デュラック Edmund Dulac（一九〇九年）、ポガニー（一九〇九年）、サリヴァン Edmund Sullivan（一九一三年）、バルフォア（一九二〇年）など、フィッツジェラルド訳第 12 歌（初版第 11 歌）に挿絵を添えた十九世紀末から二十世紀初頭にかけての画家たちはみな、曠野で詩人とともにともに座す「汝」Thou を女性と解釈している。男性である詩人との取り合わせとしては、女性の方が「絵になる」からであろう。

(60) いくつか例を挙げる。ニコラ版は “N,” ホワインフィールド版は “W” と略記（本稿では以下同様）。矢印の直後の鍵括弧内は片野訳。

・第 83 歌「ゾロアスター教司祭のズンナール（帯）」zonnār-e moghāne (N 241, W: 281) →「僧侶の帶」the girdle of the priests (p. XXVIII)。＊「ズンナール」はムスリム以外の異教徒が着用を義務付けられた帯。

・第 87 歌「ミフラーブ」meḥrāb (N: 222, W: 262) →「天」heaven (p. XXX)。＊「ミフラーブ」はメッカの方角を示すモスクの壁龕。

・第92歌「ザーヒド（禁欲家）」zāhed (N: 87, W: 89) →「哲學者」philosopher (p. XXXI)。
・第98歌「ジャイフーン」Jeyḥūn (N: 90, W: 92) →「靈魂」the soul (p. XXXIII)。＊「ジャイフーン」はオクサス川（アムー・ダルヤー）。
・第103歌「タイラサーン」teylasān (N: 191) →「布」the clothe (p. XXXV)。＊「タイラサーン」は外套の一種。
・第134歌「カウサル（天国の小川）」Kowthar (N:102, W: 132) が脱落 (p. XLV)。
・第162歌「千のマフムードとアヤーズ」hazār maḥmūd-o Ayāz (N: 219, W: 259) →「多くの君主と多くの寵臣」a thousand monarchs and a thousand favorites (p. LV)。＊「マフムード」はガズナ朝の君主、「アヤーズ」はその寵臣。
・第191歌「カイ」key (N: 279) →「王」the king (p. LXIV)。＊「カイ」は神話時代の王朝カヤーニー朝の王の称号。
・第234歌「トルコ人（の美女）」torkān (N: 111, W: 141) →「美しき少女等」the beautiful girls (p. LXXIX)。
・第242歌「中国の王国」mamlakat-ē chīn (N: 194) →「帝王の帝國」the empire of kings (p. LXXXI)。
・第269歌「シャアバーン」sha'bān (N: 172, W: 188) →「神聖なる月」the sacred month (p. XC)。＊「シャアバーン」はイスラム暦の第八月。
・第289夜「七十二派」haftād-o do mellat (N: 179, W: 194) →「地上の問題」the problems of the earth (p. XCVII) ＊「七十二派」は地上の全宗派。
・第298歌「スィームルグ」sīmorgh (N: 140, W: 163) →「聖人」the sage (p. C)。＊「スィームルグ」は神話中の霊鳥。
・第311歌「スーフィー（神秘主義者）」ṣūfī (N: 210, W: 251) →「聖人」a sage (p. CIV)。
・第315歌「ティール（四）月の到来とディ（十）月の離別」āmadan-ē tīr maḥ-ō raftan-e dey (N: 455, W: 484) →「月の長き整列」the long array of months (p. CVI)。
・第329歌「ジャムフール」Jamhūr (N: 430, W: 465) は脱落 (p. CX)。＊「ジャムフール」はササン朝の君主フスラウ一世の宰相ブズルグミフルのこと。
・第347歌「ヒドル」Khedr,「イルヤース」Elyās (N: 449, W: 480) →「聖人」a saint,「豫言者」a prophet (p. CXVI)。
・第404歌「ハーシム家の長」seyyed-e hāshimī (N: 316, W: 348) →「「主」なる「全智」」lord all-wise (p. CXXXV)。＊「ハーシム家の長」は預言者ムハンマド。
・第435歌「バダフシャーンの紅玉髄」la'l-e badakhshānī (N: 357, W: 399) →「青春の寶玉」jewels of youth (p. CXLVI)。＊「バダフシャーン」はオクサス川上流、現在のアフガニスタン北東部の地名。

（61）

いくつか例を挙げる。形式は前注に同じ。
・第50歌「カイ・カーウース」Key-kāvūs (N: 237, W: 277) →「カイコスルウ」Kai Khosrou (p. XVII)。＊いずれも神話時代の王の名。
・第147歌「平和」ṣolḥ (N: 254, W: 294) →「パン」bread (p. L)。＊ニコラ訳の“paix”を“pain”と誤読したか。
・第155歌「マリヤ」Maryam,「ブー・サイードとアドハム」Bū Sa'īd-o Adham (N: 215, W: 253) →「ハチム、タイ」Hatim Tai,「マユウン」Majnun (p. LII)。＊アブー・サイード 'Abū Sa'īd 'ibn 'Abī al-Khayr (九六七―一〇四九年) はセルジューク朝期の神秘主義者。イブラーヒーム・イブン・アドハム 'Ibrāhīm 'ibn 'Adham (七二八／九―七七年) はイスラム初期の禁欲家。ハーティム・アッ＝ターイー Ḥātim al-Ṭā'ī は寛大さで知られた六世紀のアラブ詩人。マジュヌーン al-Majnūn はライラーへの悲恋で知られる七世紀のアラブ詩人。
・第174歌「イラクの葦笛」nāy-e 'Eraqī (N: 84, W: 86) →「「イイラ

ム」の琵琶」Iram's lute (p. LIX)。＊「イラム」'Iram は『コーラン』で言及される古代アラビアの巨人族アードの民の都。「イラク」と「イラム」を読み違えたか。

・第299歌「酒」mol (N: 396, W: 438) →「薔薇」rose (p. C)。＊"mol" と "gol" (薔薇) を誤読。

・第312歌「千年」ṣad sāle (N: 277, W: 320) →「五十年」fifty years (p. CV)。

・第342歌「坩堝」būte (N: 380, W: 421) →「虚無」the void (p. CXV)。

・第403歌「数日間」rūz-ī chand (N: 308, W: 358) →「五日の間」for a measure of five days (p. CXXXV)。

・第417歌「世界の状態」aḥvāl-e jahān (N: 322, W: 365) →「生命の書」the book of life (p. CXL)。

(62) いくつか例を挙げる。

・第83歌「自分がムスリムである（のを恥じている）ため」chīz az mosalmāni-ye khīsh (N: 241); az nang-e mosalmāni-ye khīsh (W: 281) →「我は人生の我行路に疲れたればなり」Because I weary of my way of life (p. XXVIII)。

・第142歌「朝酒の呼び声」faryād-e ṣabūḥ (N: 104) →「歌の響」the sound of singing (p. XLVIII)。

・第186歌「胸の火のために頭から私の涙が流れる」az ātesh-e sīne āb-am-az sar godharad (N: 118, W: 146) →「我心に燃えたる火は今や恥を以て我面を覆くり」the fire, which . . . burnt in my heart now covers my face with shame (p. LXIII)。

・第361歌「面前には真珠母貝（のような酒杯）が置かれ，その真珠（のような酒の輝き）のお蔭で、真の夜明けを告げる鼓手が戸外に出てくる（ほどである）」dar pīsh nehādē ṣadaf-ī k-az gohar-ash / nowbat-zan-e ṣobḥ-e ṣādeq-āyad bīrūn (N: 333, W: 373) →「我等の前に貝は立ちぬ、其眞珠は鷄が曉なりと信じて鳴く程の光を放てり」Before me stood the shell whose pearl gave forth such light that the cock crew, believing it was dawn (p. CXXI)。

(63) 以下はその例である。

・第408歌「紅玉髄の色の酒以外、酔人の手から受け取るな」joz bāde-ye la'l-az kaf-e mastān ma-setān (N: 323) →「亂醉者の、亂醉者の手の中なる赤き酒を思く」think of red wine in the hands of topers, topers (p. CXXXVII)。＊原文では mastān（酔った者たち）と ma-setān（受け取るな）が同一綴りで意味の異なる二語（「ジェナース」jenās）になっている点を捉えそこね、mastān の繰り返しと誤解している。

(64) Nicolas, pp. 198–99, no. 399; Whinfield, pp. 296–97, no. 441.

(65) 意味が原詩と正反対になっている例を挙げる。

・第432歌「酒店を通り過ぎよう」bar meykade be-gdharīm (N: 311) →「其處に住むべし」Abide there (p. CXLV)。

・第439歌「我々の神はすべてであり、他に神は存在しない」de-gar-ī nīst khodā-'īm hame (N: 365, W: 410) →「我等は總べて一體なり、「神」は我等の内部と外部とにあり」we are all in all, God is within and around us (p. CXLVII)。

(66) いくつか例を挙げる。ニコラ版とホワインフィールド版で本文に異同がある場合は、それぞれの形を斜線の前後に示した。

・第75歌「空中の革命」the revolutions of the skies (p. XXVI) →「天球の回転」。＊ペルシア語原文 (N: 29, W: 33) は gardande falak（回転する天球）。

・第92歌「汝の師の爲めに智慧を取り得たり」you have taken wisdom for your master (p. XXXI) →「汝は智慧を師と見做した」。＊ペルシア語原文 (N: 87, W: 89) は ostād-e to 'aql-ast（そなたの師は理性である）。「AをBと見做す」take A for B の構文の誤読。

・第102歌「天上の青き車輪は常に千金よりも旋風を好むべければなり」For yon blue wheel may like a whirlwind at any moment dash you down (p. XXXV) →「彼方の青い天輪は旋風のように

いつそなたを打ち倒すかもしれないから」。＊ペルシア語原文 (N: 40, W: 44) は ke īn charkh-e kabūd / nāgāh to-rā cho bād gardānad past（この青い天輪は風のように突然そなたを打ち倒すから）。前置詞 like を動詞と誤読。

・第125歌「其時に汝は我塵埃の酒瓶に作らるゝを見ん」see thou that of my dust a wine-flagon is formed (p. XLII) →「私の埃から酒瓶が作られるようにせよ」。＊ペルシア語原文 (N: 290, W: 330) は zenhār gel-am be-joz ṣorāḥī ma-konīd（私の土を酒瓶以外には作らないよう注意せよ）。「〜するよう取り計らう」see (to it) that の成句を誤読。

・第126歌「汝の平和を保ちて」hold your peace (p. XLIII) →「沈黙を守って」。＊ペルシア語原文 (N: 5, W: 4) は dam dar-kesh（黙れ）。

・第191歌「僞善者の群集をのみ包容する拜堂」the chaplet which alone contains a multitude of hypocrisy (p. LXIV) →「それ単独であまたの偽善を含む数珠」。＊ペルシア語原文 (N: 279) は tasbīḥ ke peyk-e lashkar-ē tazvīr-ast（欺瞞の軍隊の使者である数珠）。

・第230歌「我等は數字の如く驚異の中に生活するなり」we, like the figures, live there in amazement (p. LXXVII) →「我々はその（走馬燈の）なかの絵模様のように驚きつつ生活する」。＊ペルシア語原文 (N: 267, W: 310) は mā chon sovar-īm andar-ū heyrān-īm / k-andar-ū gardānīm（我々はそのなかの絵柄のように当惑／回転する）。「絵柄」figures を「数字」と誤読。

・第235歌「「天の車」は其天幕の中に座し」the wheel of heaven, in setting its tent (p. LXXIX) →「天輪はその天幕を張りながら」。＊ペルシア語原文 (N: 137, W: 161) は khargah-ē charkh-e kabūd / zad kheyme（青い天輪の大天幕が天幕を張る）。setting を sitting と誤読。

・第236歌「我灰」my ashes (p. LXXIX) →「私の遺骸」。＊ペルシア語原文は「私の土」gel-e man (N: 154)。イスラムでは死骸は火葬にせず、しかも灰から酒瓶は作れない。

・第239歌「百の眞珠の中唯一つ盜まれんとすればなり」out of a hundred pearls, but one is thridded (p. LXXX) →「百の真珠のうち一つしか穿たれていない」。＊ペルシア語原文 (N: 152, W: 173) は ze ṣad gohar yekī softe be-mānd/na-mānd（百の真珠のうち一つが穴を穿たれたままだった／一つも穴を穿たれていない）。

・第319歌「死者は光榮なりとて自慢せり」boasted that the deed was glorious (p. CVII) →「この行為は栄光に満ちていると自慢した」。＊ペルシア語原文 (N: 385) は ke mardī-yo manī（男らしいと自慢した）。deed を dead と誤読。

・第348歌「一の世界を克服せんよりは」than to people a world (p. CXVII) →「一つの世界を人で満たすよりは」。＊ペルシア語原文 (N: 444, W: 476) は rūy-e zamīn be-jomle ābād konī（地上すべてをそなたが人で満たす）。people を「植民する」すなわち「征服する」と誤読。

・第360歌「酒店の最後の客なる我親しき友」Last night in the tavern my familiar friend (p. CXXI) →「昨晩酒店で私の親友が」。＊ペルシア語原文 (N: 329, W: 370) は dīshab . . . / dar meykade ān rūḥ-fazāy-ē del-e man（昨晩酒店でわが心に生気を与える者〔恋人〕が）。

・第367歌「裸麥の一粒」a brace of barleycorns (p. CXXIII) →「大麦二粒」。＊ペルシア語原文 (N: 355, W: 397) は do jow（大麦二粒）。

・第415歌「おゝ汝よ、存在の凡ての奥義とは」O thou, the quintessence of the sum of existence (p. CXXXIX) →「おお、全存在の精髄たる汝よ」。＊ペルシア語原文 (N: 319, W: 362) は ey ānke to-ī kholāṣe-yē kown-o makān（おお、宇宙の縮図たる汝よ）。呼びかけの対象と同格の単語を文全体の主語と誤読。

・第421歌「我等は歡喜を以て水の一滴だに消費せざるなり、されど我等は悲哀の手より酒を消費す」Never with cheer a drop of water do we consume, but from the hand of sorrow we consume wine (p. CXLI) →「悲哀の手から酒を消費することなくして、我々は歓喜とともに一滴の水を消費することもない」。＊ペルシア語原文 (N: 310, W: 343) は hargez be-tarab sharbat-e āb-ī na-khorīm / tā az kaf-e andūh sharāb-ī na-khorīm（悲哀の掌より酒を飲むことなしには、我々は一口の水も歓喜とともに飲むことがない）。「Aすれば必ずBする」「BなしにはAしない」never A but B の構文を誤読。同一原典から訳された第32歌では、この構文が正しく把握されている。

・第426歌「天使は其原質にして」The angels are its sensens (p. CXLIII) →「天使はその〔身体の〕諸感覚である」。＊ペルシア語原文 (N: 328, W: 369) は v-aṣnāf-e malā'ekē ḥavās-ē īn tan（諸々の天使はこの身体の諸感覚である）。sensens を essense と誤読したか。

(67) Nicolas, pp. 204–05, no. 411; Whinfield, pp. 302–03, no. 451.

(68) Nicolas, pp. 226–27, no. 457; Whinfield, pp. 326–27, no. 486.

(69) Nicolas, pp. 178–79, no. 361; Whinfield, pp. 272–73, no. 406. このルバーイーはアブー・サイード（前注（61）参照）に帰せられている。Christensen, *Recherches*, p. 31.

(70) 『未來』第二輯、一九一四年六月、一五六―六五頁。

(71) 『未來』の書評では、マッカーシーの英訳を参照しつつ主として訳語や仮名表記の問題に触れているが、解釈上の誤訳等にまでは踏み込んでいない。増野が具体的な改善案を添えて指摘する問題点をいくつか例示する。

・第15歌「幻影の提灯」a paper lantern of fancy (p. VI) →「走馬燈」を提案。ペルシア語の原語は、増野が指摘する通り fānūs-e khiyāl (W: 491)。

・第176歌「ケエヤム」Khayyam (p. LIX) →「カイヤウム」「カイヤアム」を提案。ペルシア語の原語は Khayyām (N: 81, W: 83) で、現代なら「ハイヤーム」とすべきところ。＊増野の表記は「ケエヤム」。

・第311歌「麻の葉」hashish (p. CIV) →片仮名表記の「ハツシシユ」を提案。ペルシア語の原語は、増野も触れている bang (N: 210, W: 251) で、「インド大麻」「ハシーシュ」を指す。

・第364歌「銃眼壁」battlements,「指輪鳩」ringdove (p. CXXII) →後者に「斑鳩」を提案。ペルシア語の原語は kongere, fākhte (N: 350, W: 392)。＊増野の表記は「指環鳩」。

・第398歌「鬱金香」tulip (p. CXXXIII) →「うつこんかう」は「黄色な病婦のやうな面貌を連想させる」ので、片仮名表記の「チユリツプ」を提案。ペルシア語の原語は lāle (N: 448, W: 479)。＊増野の表記は「鬱金香」。

また、第31歌と第379歌、第398歌と第449歌の重複を指摘して「無駄」「無意味」と断ずる（一六二―六三頁）が、後者は原典であるニコラ版やホワインフィールド版自体が二つの異なる作品であることに由来する。

(72) 『中央公論』第三十五卷十一號、一九二〇年十月「說苑」一―四三頁。『中央公論』への発表に当たっては、前年に結婚した中條百合子（本名ユリ。のちの宮本百合子。一八九九―一九五一年）の紹介があったのではないかと推測される。百合子は、日本女子大學英文科豫科在学中の一九一六年、坪内逍遙（一八五九―一九三五年）の紹介で『中央公論』主幹の瀧田樗陰（一八八二―一九二五年）を訪ね、「貧しき人々の群」を同誌第三十一年十号（九月）に発表、新進作家として一躍注目を浴び、その後も一九一八年九月―一九年十二月のアメリカ行きの前後を通じて多くの作品を同誌に寄稿している。

(73) 荒木の履歴は、学習院に提出された履歴書に基づいた、大野延胤（一九三一年生）による評伝『風の如くに――荒木茂の生涯』（近代文藝社、一九九五年八月）に詳しい。

(74) 同書二二〇―二一頁に、『中央公論』に発表の「ルバイヤート」訳詩から第十八番と第三十九番を再録している。

百合子の小説『伸子』では、佃の「専門に關する小著書」を「通俗的な、波斯文學概論」と呼び、「凡庸な小册子の著者によくあるやうに、常套語を平氣で數多く使つたり、廻りくどくて、明快な思想も感情もない文に出會ふと、伸子は悲しみと腹立たしさを一緒くたに感じた」と印象を述べる（四の二、二六一・二六三頁。原文総ルビ）。初出は中條百合子「崖の上」『改造』第七卷十號、一九二五年十月、一四・一五頁（「波斯文學概論」→「文化史概論」、「常套語を平氣で數多く使つたり、廻りくどくて、明快な思想も感情もない文に出會ふと」→「常套語の平氣な數多い使用、主意も明にしない不正確な文句等に出會つたりすると」）。

また、一九二三年五月八日の日記には、「せめてペルシアを研究するとすれば、他人の著書の引証で暮さず、一つの独創的発見でも持たせたいので、何だか歯痒く感じるのだ。／材料の蒐集で一生終るのか。よい世界の歴史的文章の欠（ママ）しい日本には、後に来る者の為、此も一つ、彼の生きた意味として見るべきか」（『宮本百合子全集』第二十三巻〔日記一〕、新日本出版社、一九七九年五月、六四三―四四頁）と記されている。

一般に、近世ペルシア語とそれ以前の古代イラン語、中世イラン語とでは研究分野が異なり、研究者も別々である場合が多い。荒木が師事したジャクソンも、専門領域はアヴェスター語を中心とする古代イラン語であった。それに対し本書は、言わば先駆者の特権で、一人の研究者が古代・中世・近世の諸分野を通時的に叙述している点に特徴がある。イラン学は、言語の習得や先行研究の咀嚼だけでも時間を要する分野だけに、コロンビア大学でのわずか五年半の研究から「独創的発見」を期待するのはいささか無理な注文であろう。

批評家の本多秋五（一九〇八―二〇〇一年）は、本書について、「どれだけが著者のオリジナリティーに属するのか、それを鑑別する能力は私にない」と断わりながらも、「やや古風な、決して明快とはいいがたい文章には、（中略）開拓者の人知れぬ膏油が感じられるのだ。学問と取り組んでいる男の、一種慾得以上の緊張が感じられるのだ。これは「小著書」ではあろうが、決して「通俗的なペルシャ文学概論」とひと口にいい棄てらるべきものではなかろう、という気がする」と弁護している。同『戦時戦後の先行者たち』晶文社、一九六三年九月、「断片――あるペルシャ文学史」一三一頁。同『増補　戦時戦後の同行者たち』勁草書房、一九七一年四月、一六〇―六一頁。『本多秋五全集』第八巻、菁柿堂、一九九五年十月、一四五頁。初出は『リアリズム』第四号、一九六〇年四月、六一―六二頁（「膏油が感じられるのだ」→「感じられるのである」。「緊張が感じられるのだ」→「感じられるのである」。「いい棄て」→「いいすて」。「なかろう、」→「ない」）。

なお百合子は、おそらく荒木の影響を受けて、ペルシア詩人フィルダウスィー Firdawsī（九三四―一〇二五年）の英雄叙事詩『シャー・ナーメ（王書）』*Shāh-nāme* に取材した小説「古き小画」（『宮本百合子全集』第二巻〔小説二〕、一九七九年六月、三二八―四二六頁。初出は中條百合子「ふるき小畫（ミニエチュア）」として『小樽新聞』一九二四年一月十四日〔第三面〕―三月九日〔第三面〕まで五十二回連載）を発表している。

(75) 荒木に対する評価は、評者の立場（百合子や荒木との関係の親疎）や視点（人間性や人格と学術的・教育的貢献とのいずれを重視するか）によって大きく異なる。

・荒木の故郷・福井に赴いて調査をした教育学者の島為男（一八九一―一九八八年）は、彼が「無能で気のきかない、学者マニア的異常さの感じられる学者」で「閉塞的で、暗くジメジメした性格」を持つとし、「彼の多くの信書を調査し、その文章、文字、記載様式等を見たのであるが、文字がなってい

ず、いじけており、遅筆で、しかも文意も通じかねる、当て字ばかりの書面にウンザリした」（同『宮本百合子――抵抗に生きた大正精神』桜楓社、一九六七年八月、一二〇・一二三頁）と否定的である。

・「大学での研究室が近かったという因縁」で荒木と顔を合わせる機会があった仏文学者の中島健蔵（一九〇三―七九年）も、「正直にいって、わたくしは、『伸子』に描かれた佃の名残りを、彼の上に認めないわけにいかなかった」（同「人と文学」『現代文学大系』38〔宮本百合子／佐多稲子集〕、筑摩書房、一九六四年三月、四八九頁。中村智子『宮本百合子』筑摩書房、一九七三年六月、八〇頁）と、百合子に近い見方をしている。

・大野延胤『風の如くに――荒木茂の生涯』は、現地調査を踏まえながら、荒木の教育者としての側面に光を当て、再評価を試みている。

・百合子と親交のあった野上彌生子（一八八五―一九八五年）は、戦後の一九五一年六月二十五日の日記のなかで、百合子のコロンビア時代を知る知人「お清さん」（巌本善治（よしはる）・若松賤子夫妻の長女・中野清子〔一八九〇―一九七一年〕であろう）の言葉として「荒木といふ男は米国ゴロの苦労人で、狡い、暗らい翳をもつてゐる」（『野上彌生子全集』第Ⅱ期第十一巻、岩波書店、一九八八年五月、八七頁）と記す。「亞米利加（アメリカ）ごろ」は『伸子』（二の八、一四九頁。初出は『改造』第七巻一號、一九二五年一月、「搖れる樹々」一〇七頁。ルビなし）で用いられている言葉である。しかし後年は、「私も口には出さなかったけれども心の底では荒木だけを一方的に責める、たとえばペルシャ文学などというものを、あんなものをといったような気持で百合子さんは考えていなすったようだけれど、私としては一つの学問として立派な選び方をしているし、ペルシャ文学だっておおいに研究すべきものだ、そこいらがちょいと私と違っていたんです」「荒木さんに対しては、百合子さんに対するのと同じ質の同情をもっていた」（「百合子さんのこと――インタビューにこたえて」『宮本百合子全集』第二巻、新日本出版社、一九七九年六月、「月報」6、二―三頁。のち、『野上彌生子全集』第二十三巻〔評論・随筆六〕、岩波書店、一九八二年四月、三四五―四六頁）と述べる。大野『風の如くに』一四〇頁は、このインタビューを引用して、「もしも荒木が生きてこの告白を聞いたとしたら、それは彼にとってどんなに温かい慰めとなったであろう」と付記している。

・前嶋信次は、『伸子』における佃の描写を引きながら、「格別に陰気な顔だったとは思わなかったけれども、きわめて質素で、話しやすい人柄のように思われた。尊大さというようなものは全く見られなかった」と回想し、『ペルシヤ文學史考』への伸子の批評については、「ある点では痛いところをついているが、また、あるところでは、このような著作への理解の乏しさを示した点もあるように思われる」と評する。同『アラビア学への途――わが人生のシルクロード』日本放送出版協会、一九八二年六月、三一―三七頁。

・同じ荒木ペルシア語教室の出身で、満鐵東亜經濟調査局西南アジア班で前嶋信次の同僚となり、のちに松山商科大学教授・学長も務めたイラン学者の八木亀太郎（一九〇八―八六年）は、後年の論文「神名雑俎」（『松山商大論集』第十六巻五号、一九六五年十二月、五三―八六頁。のち『八木亀太郎論文集』Ⅱ、西田書店、一九八八年二月、一八九―二二二頁）に「故荒木茂先生に捧ぐ」と副題を付している。

・文芸評論家の川西政明（一九四一―二〇一六年）は、「一生涯を図書館の世話になって暮らすことしか考えていなかった人が、中条家の後押しで東京帝国大学でペルシャ語の研究ができ、慶應義塾大学でギリシア語、英語を教授し、明治大学で英語を教授し、女子学習院の英語専任講師になり、岩波書店から「ペルシャ文学史考」を刊行できた。のち東京帝国大学文

学部でイラン学を教えた。彼にとり学問で身を立てることができれば、それで十分だったのである。／百合子はこの荒木を相手に「伸子」ではなく「縮子」になった」と、両者の人生観の違いに言及する。また『伸子』に描かれた荒木から漢字研究の白川静（一九一〇―二〇〇六年）を想起し、白川は「話していて実に愉しい人であった」のに対し、「荒木にはその陽気さがない」と両者を対比している。同『女性作家の世界』新・日本文壇史、第八巻、岩波書店、二〇一二年五月、一七六―七七頁。

(76) Heron-Allen 1898, pp. 266–67, 272–73.「明治日本」一〇―一一頁。第百四十九番はニコラ版の第四百十三番、ホワインフィールド版の第四百五十二番に等しく、本稿の注番号（54）を付した本文中に既出。第百五十五番はニコラ版の第四百四十八番、ホワインフィールド版の第四百七十九番にほぼ対応し、注番号（56）を付した本文中に既出。

(77) Heron-Allen 1898, pp. 198–99.

(78) 第百二十六番。原文は ḥāl-i bīn（現状を見よ）。

(79) 第百二十七番。原文は gerd-e nīkovān gardīdan（美人らの周囲を歩き回ること）。

(80) 第百三十一番。原文は az dars-e ʿolūm jomle be-grīzī beh（すべての知識の探求からそなたは逃げる方がよい）。

(81) 文意を取りにくい類似の例をいくつか示す。

・第二十二番「一篇の歌に賣りぬ」be-rāyegān-ash be-forūkht → 「彼を無料で売り払った」。＊ヘロン＝アレンの英訳 “for a mere song”（ただ同然で）を直訳したか。

・第四十一番「天に轉(もど)戻すことを得ず」bā charkh ma-kon ḥavāle → 「天に委ねるな」。＊ヘロン＝アレンの英訳 “do not impute *them* to the heavens”（それらを天に帰するな）に引かれたか。

・第五十二番「愛の途には境界と邪氣あるべからず、／死(アジャル)の陰に入る日は滅びざるべからず」andar rah-e ʿeshq pāk mī bāyad shod / dar chang-e ajal halāk mī bāyad shod → 「愛の途のなかでは無と化さねばならぬ／死の鈎爪の下では死滅せねばならぬ」。

・第六十三番「今は我が魂總ての惱の中に鬪ふ」aknūn hame dar ranj-e del-am mī kūshī → 「今やそなたは私の心を苦しめるためだけに努力する」。

・第六十八番「薔薇色の酒を爾に命ぜよ」farmāy ke tā bāde-ye golgūn ārand → 「そなたは彼らに薔薇色の酒を持ってくるよう命じよ」。＊「爾に」は「爾のために」の意味で訳されたのかもしれないが、このままでは命ずる対象と誤解されやすい。

・第七十二番「誰か永遠の難關を潜り」kas moshkel-e asrār-e azal-rā na koshād → 「永遠の秘密の難問を解いた者は一人もいない」。

・百十番「自認の充溢せる習あふるゝ一杯を／顔になげて夢地に往かん」īn ʿaql-e foḍūl-pīshe-rā moshti-ye mey / bar rūy zanam chonān-ke dar khāb konam → 「このお節介焼きの理性は、一握りの酒を顔前に投げかけて眠らせよう」。

・第百二十番「我酩酊を越えて階段を知らば」gar martabe-yē varāy-e mastī dānam → 「もし私が陶酔の向こう側の段階を知っているなら」。

(82) Heron-Allen 1898, pp. 140–41.

(83) 注番号（32）を付した引用文参照。

(84) Heron-Allen 1898, pp. 266–69.

(85) いくつか例を示す。

・第三十七番「萬物の上に懸る酒盃、天蓋」charkh ke kāme-yē sar-ē ʿālam ū-st → 「世界の頭の口蓋（＝頭蓋骨の空洞）である天」。

・第五十一番「我が出現は宇宙の存在を意味せず」az āmadan-am na-būd gardūn-rā sūd → 「私の到来は天球にとって何の利益もなかった」。

・第六十二番「彼等購求(もと)むる酒、賣るものに勝る」beh z-īn ke

forūshand che khāhand kharīd →「彼らは自分たちが売るこの酒よりよい何を買うつもりなのか」。

・第六十九番「此の琥珀色の面を紅玉石の如くす」v-īn chehre-ye kahrobā cho yāqūt konīd →「この琥珀色の顔を紅玉のごとくせよ」。＊この歌の命令形 konīd を荒木訳は「如くす」「造らん」のようにすべて現在形・未来形に訳す。また「琥珀」に付した註釈では、「原語に目を引く藁の色とあり」とあるが、「目を引く藁」という訳は不適切であろう。彼が引くスタインガス『ペルシア語・アラビア語辞典』の説明 “Attracting straws” は、琥珀を意味するペルシア語 “kahrobā” が “kah” (藁) と “robā” (動詞「盗む」robūdan の語根) という二単語から合成され、琥珀の持つ電磁性に由来する命名であることを示すので、「藁を引き寄せる」とでも訳すべきところ。F. Steingass, *A Comprehensive Persian-English Dictionary*, London: Routledge & Kegan Paul, 1892, p. 1066. ちなみにこの言葉は、近代にアラビア語に入ると「電気」を意味するようになる。

・第七十三番「勢運の結束より生命の善悪を分ち」va-z nīk-o bad-ē zamāne be-gsel peyvand →「運命の善悪への執着を断ち切れ」。＊荒木訳はヘロン＝アレンの英訳 “sever the bonds of thy dependence upon the good and bad of life” に引かれた可能性がある。

・第八十六番「妻子より別れん事を神に願はゞ」ū-rā khāhī az zan-o farzand be-bor →「そなたが彼（＝神）を願う（のなら）妻子と別れよ」。

・第九十八番「二本の蘆薈をとりて集に賣れ、／一本を笛に、他の枝を捨てよ」bar-dār do ‘ūd-rā o majles be-forūz / yek ‘ūd be-sāz-o ān degar ‘ūd be-sūz →「二本の沈香を取って集会を輝かせよ／一本のウードを作り、他の一本は燃やせ」。＊ forūkhtan（燃やす）の語根 forūz と、同じ forūkhtan（売る）の語根 forūsh とを混同している。

・第百七番「無終の永遠と無始の永遠の何時まで新しき」tā key ze abad ḥadīth-o tā key ze azal →「無始無終の永遠についていつまで語るのか」。＊「語り」を意味する “ḥadīth” を形容詞「新しい」と誤解している。「アバド」「アザル」は永遠の持つ「無終性」「無始性」の二側面を指す対概念。ヘロン＝アレンの注にあるローマ字転写 “ābad,” “āzal” に引かれて、荒木訳は「アーバド」「アーザル」と仮名表記する。

・第百八番四行目「茫然と立つ」gardān-īm →「回転する」。

・第百二十一番「我等何處に達せん」mā-rā che rasīd →「我々に何が起こったか」。

・第百二十五番「身に纏ふその衣に留意せゞらん爲め」tā dar nadehī be-jāme-yē ṣūrat tan →「模様のある衣服のために身体を犠牲にしないように」。

・第百三十三番「月又月に繰り返す」ze māh tā māhī →「月から魚まで」「全世界において」。＊大地が巨魚の背中に載っているとする中東世界の宇宙観に基づく定型表現。

・第百三十七番「仙境に生える素馨の貌」saman-barī parī-zād →「ジャスミンの香りの胸を持つ妖精の子」。

・第百五十八番「陶工」ḥammāl →「荷担ぎ屋」。＊ヘロン＝アレンの英訳 “porters” を “potters” と誤読したか。

（86）いくつか例を示す。矢印の直後に本来あるべき仮名表記を古典音で、丸括弧内にそのローマ字転写を（古典音と現代音が異なる場合は斜線の前後に両者を）示す。荒木は古典音を基調としつつも、しばしば現代音を混ぜて表記している。

・第二十四番「修道院」→「修道院」dayr/deyr.

・第三十五番「配偶」→「配偶」juft/joft.

・第三十九番「心血」→「心血」khūn-i dil/khūn-e del.

・第三十九・九十九・百三十一番「頸長盃」「頸長盃」→「頸長盃」ṣurāhī/ṣorāhī.

・第七十四番「水仙」→「水仙」sūsan.

・第七十九番「原子」→「原子」dharra/dharre.

・第八十五番「生魂（ディール）」→「生魂（ディール）」dil/del.
・第九十九番「咒文（タクビール）」→「咒文（タクビール）」takbīr.
・第百十五番「祈の坐氈（サッジャーダト）」→「祈の坐氈（サッジャーダ）」sajjāda/sajjāde.
・第百二十九番「愛よ（シャーガル）」→「愛よ（サーガル）」butā/botā.
・第百三十四番「玉杯（ブター）」→「玉杯（ブター）」sāghar.
・第百五十八番「シャヴァール（カヴァール）」→「シャウワール（カウワール）」Shawwāl/Shavvāl,「卽興詩人（カヴァール）」→「卽興詩人（カウワール）」qawwāl/qavvāl.

また、語末の h は短母音 a に続く場合には発音されないが、荒木は多く長母音で表記する。以下、矢印の直後に本来あるべき仮名表記とそのローマ字転写（古典音／現代音）を示す。

・第二十四番「學園（マッラセー）」→「學園（マドラサ）」madrasa/madrase.
・第四十六番「目示（ガムザー）」→「目示（ガムザ）」ghamza/ghamze.
・第四十七番「月初（グルラー）」→「月初（グルラ）」ghurra/ghorre.
・第六十二・六十五番「被衣（パルダー）」→「被衣（パルダ）」parda/parde.
・第百十一・百三十八番「頸長瓶（クージャー）」「頸長瓶（クーザー）」→「頸長瓶」kūza/kūze.
・第百二十三番「節食（ルーザー）」→「節食（ルーザ）」rūza/rūze.
・第百三十四番「瓶（シーシャー）」→「瓶（シーシャ）」shīsha/shīshe.
・第百四十七番「玉盞（ピヤーラー）」→「玉盞（ピヤーラ）」piyāla/piyāle.

(87) 例えば矢野峰人「RUBAIYAT の研究」や矢野禾積『近代英詩評釋』では、フィッツジェラルド訳を解釈するための参考資料として、片野訳の第二、百八十八、四百三十四番とともに、荒木訳の第二十一、三十四、四十三、四十七、六十八、百二十一番を引いている。戦後の黒柳恒男『ペルシアの詩人たち』（東京新聞出版局、一九八〇年六月、一二二頁）は、荒木訳の第九番と第十二番を見本として引用する。

(88) 赤木健介『在りし日の東洋詩人たち』白揚社、一九四〇年五月、六七頁。本書は一九四〇年度の第四回北村透谷記念文學賞副賞を得、翌年七月に改訂新版が出されている。

付表：マッカーシー訳原拠一覧

＊P：掲載頁，M：マッカーシー訳歌番号，N：ニコラ版歌番号，W：ホワインフィールド版歌番号

P	M	N	W	P	M	N	W	P	M	N	W	P	M	N	W
1	1	–	387	13	37	54	57	25	73	28	32	37	109	56	59
	2	–	389		38	55	58		74	27	31		110	160	–
2	3	460	360	14	39	95	96	26	75	29	33	38	111	161	179
	4	–	352		40	225	264		76	26	30		112	99	100
	5	45	48		41	233	272		77	238	278		113	162	180
3	6	182	197	15	42	16	19	27	78	30	34	39	114	163	181
	7	6	5		43	17	20		79	239	–		115	243	283
	8	7	6		44	235	–		80	33	37		116	57	60
4	9	8	7	16	45	19	22	28	81	227	266	40	117	244	284
	10	9	8		46	20	24		82	240	280		118	246	285
	11	10	9		47	94	–		83	241	281		119	58	61
5	12	–	425	17	48	224	–	29	84	226	265	41	120	3	2
	13	–	499		49	236	276		85	242	282		121	60	63
	14	–	493		50	237	277		86	31	35		122	2	–
6	15	–	491	18	51	22	26	30	87	222	262	42	123	59	62
	16	41	45		52	23	27		88	32	36		124	4	3
	17	42	–		53	24	28		89	34	38		125	290	330
7	18	43	46	19	54	25	29	31	90	35	39	43	126	5	4
	19	44	47		55	71	74		91	186	201		127	289	329
	20	181	196		56	75	77		92	87	89		128	291	331
8	21	221	261	20	57	72	–	32	93	187	202	44	129	61	64
	22	223	263		58	73	75		94	86	88		130	63	66
	23	234	273		59	74	76		95	36	40		131	64	67
9	24	11	10	21	60	230	269	33	96	88	90	45	132	100	101
	25	12	11		61	231	270		97	37	41		133	101	102
	26	13	12		62	46	49		98	90	92		134	102	132
10	27	14	17	22	63	232	271	34	99	89	91	46	135	65	68
	28	15	18		64	294	332		100	38	42		136	247	286
	29	21	25		65	18	21		101	39	43		137	249	288
11	30	309	–	23	66	47	50	35	102	40	44	47	138	248	287
	31	312	344		67	48	51		103	191	–		139	250	291
	32	310	343		68	228	267		104	192	205		140	67	70
12	33	315	347	24	69	49	52	36	105	96	97	48	141	253	293
	34	51	54		70	50	53		106	97	98		142	104	–
	35	52	55		71	308	358		107	245	289		143	251	292
13	36	53	56	25	72	229	268	37	108	98	99	49	144	252	–

P	M	N	W	P	M	N	W	P	M	N	W	P	M	N	W
49	145	103	133	62	183	1	1	74	221	125	152	87	259	170	186
	146	255	295		184	208	250	75	222	202	246		260	145	167
50	147	254	294		185	209	–		223	128	155	88	261	213	–
	148	105	134	63	186	118	146		224	136	160		262	146	168
	149	68	71		187	283	323	76	225	203	–		263	174	189
51	150	66	69		188	117	145		226	204	247	89	264	265	308
	151	69	72	64	189	91	93		227	258	–		265	173	–
	152	288	328		190	276	319	77	228	257	298		266	175	190
52	153	62	65		191	279	–		229	127	154	90	267	169	–
	154	109	139	65	192	115	–		230	267	310		268	171	187
	155	215	253		193	116	144	78	231	256	297		269	172	188
53	156	70	73		194	269	312		232	259	299	91	270	119	–
	157	108	138	66	195	157	176		233	193	206		271	196	–
	158	287	327		196	158	177	79	234	111	141		272	148	169
54	159	216	257		197	159	178		235	137	161	92	273	167	184
	160	217	258	67	198	270	313		236	154	–		274	144	–
	161	218	–		199	271	314	80	237	268	311		275	185	200
55	162	219	259		200	262	305		238	126	153	93	276	165	183
	163	220	260	68	201	261	301		239	152	173		277	156	175
	164	76	78		202	272	315	81	240	205	–		278	149	170
56	165	106	136		203	263	306		241	164	182	94	279	176	191
	166	78	80	69	204	121	148		242	194	–		280	197	241
	167	79	81		205	122	149	82	243	274	317		281	178	193
57	168	107	137		206	129	239		244	275	318	95	282	155	–
	169	80	82	70	207	260	300		245	211	252		283	294	332
	170	188	203		208	131	157	83	246	207	249		284	177	192
58	171	189	–		209	264	307		247	153	174	96	285	206	248
	172	190	204	71	210	123	150		248	151	172		286	393	435
	173	199	243		211	132	158	84	249	195	240		287	142	165
59	174	84	86		212	112	–		250	266	309	97	288	150	171
	175	201	245	72	213	280	–		251	214	–		289	179	194
	176	81	83		214	130	156	85	252	120	147		290	458	487
60	177	82	84		215	138	162		253	212	–	98	291	180	195
	178	83	85	73	216	281	–		254	135	–		292	198	242
	179	77	79		217	282	322	86	255	133	–		293	440	–
61	180	85	87		218	124	151		256	166	–	99	294	184	199
	181	285	325	74	219	110	140		257	168	185		295	147	–
	182	286	326		220	273	316	87	258	134	159		296	390	432

P	M	N	W	P	M	N	W	P	M	N	W	P	M	N	W
100	297	139	–	112	333	315	347	124	369	305	341	136	405	318	361
	298	140	163		334	451	–		370	368	413		406	303	339
	299	396	438		335	362	407		371	314	346		407	321	364
101	300	183	198	113	336	325	366	125	372	324	–	137	408	323	–
	301	141	164		337	420	459		373	331	372		409	304	340
	302	409	449		338	421	–		374	326	367		410	306	342
102	303	143	166	114	339	381	–	126	375	327	368	138	411	401	443
	304	292	–		340	427	464		376	335	374		412	320	363
	305	442	474		341	384	428		377	334	–		413	360	405
103	306	293	–	115	342	380	421	127	378	340	379	139	414	309	–
	307	424	461		343	434	469		379	312	344		415	319	362
	308	278	321		344	436	471		380	332	–		416	406	–
104	309	402	444	116	345	389	431	128	381	338	377	140	417	322	365
	310	459	488		346	443	475		382	438	–		418	415	454
	311	210	251		347	449	480		383	417	456		419	426	463
105	312	277	320	117	348	444	476	129	384	410	450	141	420	302	338
	313	412	–		349	454	483		385	377	419		421	310	343
	314	92	94		350	387	430		386	439	472		422	347	385
106	315	455	484	118	351	423	460	130	387	435	470	142	423	346	384
	316	93	95		352	437	–		388	433	468		424	353	395
	317	450	–		353	336	375		389	429	–		425	356	398
107	318	425	462	119	354	330	371	131	390	416	455	143	426	328	369
	319	385	–		355	345	383		391	422	–		427	313	345
	320	284	324		356	428	–		392	364	409		428	341	380
108	321	407	447	120	357	374	417	132	393	431	466	144	429	339	378
	322	386	429		358	348	390		394	419	458		430	352	394
	323	200	244		359	378	–		395	404	446		431	354	396
109	324	418	457	121	360	329	370	133	396	317	349	145	432	311	–
	325	383	427		361	333	373		397	461	–		433	344	382
	326	432	467		362	343	–		398	448	479		434	337	376
110	327	460	360	122	363	349	391	134	399	456	485	146	435	357	399
	328	414	453		364	350	392		400	371	–		436	361	406
	329	430	465		365	342	381		401	388	–		437	358	404
111	330	441	473	123	366	351	393	135	402	382	–	147	438	363	408
	331	452	481		367	355	397		403	308	358		439	365	410
	332	307	–		368	359	426		404	316	348		440	400	442

P	M	N	W	P	M	N	W	P	M	N	W	P	M	N	W
148	441	376	–	150	448	457	486	152	455	391	433	155	462	373	416
	442	408	448		449	413	452	153	456	398	440		463	370	414
	443	367	412	151	450	379	420		457	399	441		464	375	418
149	444	447	478		451	411	451		458	392	434	156	465	366	411
	445	445	–		452	405	–	154	459	394	436		466	369	–
	446	453	482	152	453	403	445		460	395	437				
150	447	446	477		454	397	439		461	372	415				

＊マッカーシー訳の頁番号はローマ数字で示されているが，表では算用数字に替えてある。
＊マッカーシー訳には歌番号が付されていないので，冒頭から順に 1 から 466 まで通し番号を振った。
＊ニコラ版とホワインフィールド版との対応関係は，以下に依拠した。Arthur Christensen, *Recherches sur les Rubāʿiyāt de ʿOmar Ḫayyām*, Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, 1905, Appendice I: Concordance des principales éditions et de quelques manuscrits des Rubāʿiyāt de ʿOmar Ḫayyām, pp. 140–53（Editions de Whinfield et de Nicolas）．対応関係が存在しない場合は「–」で示す。
＊同一原典から重複して訳されている歌は，本文注（53）に示したように，以下の 6 組である。
・3/327, 30/414, 31/379, 32/421, 33/333, 71/403.
＊マッカーシー訳に採用されなかった歌は以下の通り。なお、マッカーシー訳は 1889 年という刊行時期から考えると，ホワインフィールド版の初刊本（1883 年）を利用しているはずなので，第二版（1901 年）で付加された第 501–08 番はおのずと対象外となる。
・ニコラ版：113, 114, 295–301, 462–64.
・ホワインフィールド版：13–16, 23, 80, 103–31, 135, 142–43, 207–38, 251–52, 254–56, 258–61, 274–75, 279, 290, 296, 302–04, 333–37, 346–47, 350–51, 354, 356–57, 359, 386, 388, 400–03, 422–24, 480, 484, 486, 489–90, 492, 494–98, 500.